



次 目

| | |
|--------------------|---|
| 釋迦如來の名號…………… | 本 |
| 信行の基調を説ける観普賢經…………… | 多 |
| 所謂方面委員制度問題に就て…………… | 日 |
| 記事報導…………… | 生 |
| | 井 |
| | 村 |
| | 日 |
| | 成 |
| | 石 |
| | 田 |
| | 誠 |

第三十一年一月號

第三十一年一月號



大僧正本多日生師著

一切の勝利は人格にあり

——名古屋放送局の講演——

| | | |
|----|-------|-------|
| 一部 | 金五錢 | 送料金貳錢 |
| 十部 | 金三十五錢 | (送料共) |
| 百部 | 金三圓 | (送料共) |

第貳拾八版發行

名古屋市東區田代町城山

發行所

統一編輯局

振替名古屋一〇八一九

教義信條の整束

(其四)

(六月二十八日統一閣に於ける講演)

釋迦如來の名號

一、釋迦如來と眞理 二、釋迦如來と諸佛 三、釋迦如來と題目

本 多 日 生

一、釋迦如來と眞理

本日は釋迦如來の名號に就て教義信條の整束をお話しようと思ふ。釋迦如來の名號に關して適當なる會得信解が成立ちますれば、佛敎の教義信條の大部分が解決されるのである。釋迦如來の御名に於て信仰を捧ぐる者と、他の佛名に於て信仰をする者との間に佛敎の分裂を來して居るのである。それ故にその釋迦牟尼如來の御名と他の佛名との關係が適當に解決せられると、佛敎の教義信條の分裂紊亂して居ることは大部分結束せられると信するのである。それは廣く信教諸宗に就ての事である。

いま一つは、日蓮聖人の主張は佛敎の統一を理想して起つたことは頗る明瞭であるが、悲しい哉、今日その門下はやはり分裂紊亂の状態に相成つて居るのである。これを結束するに就ては、釋迦如來の名號と法華經の題號、即ち「南無妙法蓮華經」と唱へて居ることに關して、その關係が適當に會得せられるなら

ば、日蓮門下の教義信條に於ける多くの葛藤はこれを結束することが出来やうと思ふ。その他にもこの名號よりして自ら解決せられることがあるが、今は暫く問題をこの二つの方面に限つて、特にその關係を明瞭にして置きたいと思ふのである。

先づ第一に釋迦如來の名號と諸種の佛名との關係に就て申上げようと思ふ。

その關係を觀る前に、吾々佛教徒が教はれる根本の力は何處から出て來るかといふことを明瞭にして置きたいと思ふのである。いろ／＼な名前や小さな名前に頭腦を突き込むその前に、吾々佛教徒は何に依つて教はれるのであるかといふことを單刀直入に考へて見たならば、餘程今日の紊亂して居る佛敎の纏りが附くと思ふのである。

さうすると、吾々は眞理に依つて教はれると答辯する人もあるが、眞理と吾々が直接することが出来るならば、如來の出現は不用である譯である。眞理が直接人を教ふのではなくして、その眞理は如來に應用されて吾々を教ふ用をなすのである。自然の儘それが吾々に直接するならば、それは佛敎を要しないことである。事實に於て眞理といふことは何を指すかといへば、哲學的に論證をしても「實在」といふことが眞理の根本である。その事物が始め無く終り無く存在をして居るといふことが眞理である。モウ一つはその存在して居るもの、相互の關係、關聯する所に眞理といふ言葉が現れて居るのである。たゞ眞理といつても漠然たるものではない、眞理といふことは迷へる者も悟れる者も始め無く終り無く存在して居るものだといふことを明かにする、それが即ち眞理である。さうして迷へる者と悟れる者との間に關係があり關聯があるといふことを明かにする、それが即ち眞理である。併ながら吾々迷へる者は始め無く終り無き

存在者であるけれども、迷ひそのものがこれを蔽うて、その始め無き終り無き眞實の有様を見ることが出来ず、即ち生死流轉を辿つて、死にたくないと思つても死んで行くし、さうして生れたのやら、さうして死んで行くのやらわからぬやうな譯で、自分が始め無く終り無き完全なる存在者であるといふことは、たゞさう考へたり聞いたりするだけであつて、事實は他に依つて動かされて居る所の、生死無常の憐れ果敢無き存在者であるのが事實である。さうして又佛様なり悟れる者との間に關係があり、關聯があるとしても、如何にしてその關係關聯に依つて吾々の迷ひを轉じて悟りに就くことが出来るかと申したならば、たゞさういふことを考へるだけに依つては吾々は悟れることは斷じて出来ないのである。自分と佛様とは深い關係がある、關聯があるといふことを承知しても、それがさういふ具台に繋つて行くかといふことになると、即ち機械的關係と申して、その本質本体が同じものだ、心の中には佛性がある、と言つて見た所でその佛性が如何に動いて、如何に發展をして佛様に成るかといふ實際の問題になると、そこに即ち教を要し、佛を要することになつて行くのである。さうしたら宜しいかといふ問題に移つて、そこで始めてこれを教ふべき所の教があり、その憐れなる有様に落ち行く者を導かんとするところの慈悲の救ひがある。吾々の方にもその教を通し、その慈悲に縋つて向上しようといふ發心信行が起つて、そこに精神的關係を結んで、始めて吾々は悟りの方に向上をして行くのである。そこに人格的關係を取るののである。冷やかなる機械的關係ではなく、たゞ存在して居るといふことではなくして、こちらにも精神があり、向ふにも精神がある。向ふに教はんとするところの熱烈なる慈悲濟度の心があり、吾々にも覺醒して向上せんとするとところの發心信仰の心があつて、その發心信仰と、慈悲濟度の心と心の感應の結び付く所に宗教を生

じ、吾々の向上の道が開かれて行くのである。

それが事實であつて、それを「真理」といつても宜いのである。この精神的關係を見ないで真理といふやうなことは、洵に冷やかな、たゞ實際の半面を見て居るだけのものである。丁度これを一家族で言うて見たならば、親と子といふものが居るけれども、たゞその肉体的の關係を論じて、誰々は誰が産んだといふやうな關係だけを見て、親はその子供を愛するといふ精神上の事を考へない、子はその親を慕ひ、且つ親に導かれて立派な者に成るといふ、親子の精神的の關係を認めずして、丁度豚が子を産んだやうな具合に、親も豚である、子も豚である、大きくなれば何貫目になつて、一貫目いくりに賣れるといふやうなさういふ肉の關係を以て宗教や道徳を見るといふことは、非常な間違つたことである。本當は肉体と肉体とが親子の關係であつても、親は子を愛せず、子は親を慕はず、或は親は子を喰ひ物にし、子は親を呪つてこれを殺さうとするやうな、その精神に於て相反するものがあつたならば、それは親子と言ふことは出来まい。たゞ形の方から、肉の方から言へば親子であるけれども、精神的に道徳的に將た宗教的に考へる親子といふものは、たゞ親が自分を産んだといふやうな機械的の關係を言ふ意味ではなくして、精神的の關係に於て親子といふ意味が最も大事なのであらうと思ふ。

左様な譯であるから一通り親子と言つたならば、「お花はお千代といふ女が産んだ」といふやうなことでお千代は親である、お花は子である、その親がどう考へて居らうが、子がどう考へて居らうが、これは親子であると言つて、戸籍の上は通るであらうけれども、さういふやうなことは道徳宗教の上から見ては意味をなさないとナンである。又眞の宇宙の状態は、左様な意味に於て佛と吾々とは關係を有つて居るの

ではない。基督教の教義ならばさういふお佛のやうなことを言つて、人間は皆な神様がつくつて呉れたのだから、神様が親で我等は子であるといふやうな、殆ど肉体的の親子の關係のやうなことを言つて有り難がつて居るのであるけれども、それは事實神様が人を産むものではない。人間の体を産んで呉れる者は現在の人間の親であり、魂は誰から拵へて貰つたものでもない、本來獨立の存在者であること故に、神様が産んだといふやうなことは、魂に就ても体に就ても關係の無い事である。併しさういふ假定を以て實際として居る教ならば、親子といふことは精神的の關係を捨て、も、兎に角神様が産んだ子ぢやといふやうなことが言へるか知らぬけれども、佛教では佛様が人間の親子の肉の關係のやうな意味に於て、一切衆生を産んだところの子だといふやうなことは、七千餘卷の經卷中に一つも説いて無い、寧ろその反對の意味合が何處にも説いてあるのである。

であるから迷へる者と悟れる者との關係といふことが、基督教のやうなものでもなく、世間の人間の肉体的親子のやうな關係でもないのであつて、何處までも精神的の關係を以て觀るのである。我が皇室と國民の關係を觀る場合も同じことである。天皇は我等國民を子として御覽になり、吾等は 天皇陛下を父とし、皇后陛下を母として、義は君臣の關係であるけれども、情は父子の如くであると申す場合には、決して天子様に依つて体を産んで貰つたといふことではないであらう。それと同じことで、さういふ俗論や俗見を以て崇高なる宇宙の實相を考へるといふことは許されないのである。

どうしてもこの點に就ては、眞理々々といふやうな言葉でごま化してはいかぬのである。そこにもやはり佛様の尊い意味合に達して、始めてそれが佛教で教へる實相眞實である。佛様を除外して置いて、佛様

よりも真理が上ぢやといふやうな言葉の使ひ方をしたら、「そんなお化けみたやうな真理が何處にあるか」といふなり蹴散かしてしまはなければいかぬ。佛様よりも尊い真理ナンと言つて出て来るやうな、さういふ假設の言葉といふものは間違つて居るのである。佛様もござらぬやうなさういふ宇宙實相であるならば實に暗黒の世界であつて、そんな詰らぬ世界が存在するならば、我等衆生は永遠に失望の状態に置かれなければならぬのである。幸に迷へる我等と同時に、若くは我等に先立つてと申したいくらゐなのである。我等のみが先にあつたといつて威張つて見たところが、さういふ迷ひが先に存在して、迷へる者のみが存在する世界ナンといふものは實に憐れなものである。そこに悟れる佛様が存在することに依つて、始めて世界は光明を發見することが出来るのである。

であるから真理と釋迦牟尼佛の關係といふことに就ても、十分その點を考へて、決して真理などといふ空虚な言葉に脅かされて、釋迦牟尼佛の智慧を渴仰するところの信仰、釋迦牟尼佛の功徳を讃歎するところの精神を失ふてはならないのである。

ロ、釋迦如來と諸佛

次に他の佛の名前に於て、釋迦牟尼如來よりも偉いやうに思はれて居るのがある。例へば阿彌陀如來の親切は釋迦如來よりも強い、釋迦如來の力の及ばざる者も阿彌陀如來は救ふ、さうすれば釋迦如來は阿彌陀如來より親切が足らぬ、力が足らぬ、あかない佛ぢやといふことになる譯であるが、さういふ意味を以て宗旨を樹て、居る者もあるけれども、左様なことはモウ根本に於て意義をなさないところの大誤解、大

謬見といふものである。そんなことが佛敎の中に許さるべきではないのである。或は又大日如來は釋迦如來などよりはズツと偉い者だ、釋迦如來は大日如來の香を取ることも出来ぬ、草履を直すことも出来ぬ、側に寄ることも出来ないといふやうな具合に、モウ正面から釋迦如來を侮辱して居るところの者もあるけれども、これは能く／＼天一坊式に、最初から悪い事と知つて居つて、表面も無く言ふところの、謂はゞ陰謀的の議論である。一通りの人間の考には出ないことである。佛敎を信する者が釋迦如來が草履取りにも及ばぬ、側にも寄り附けぬナンといふやうな方向へ議論を向けることは、丁度日本の國民にして難波大助の如く、殿下にピストルを向けて平然として居ると同じ行き方である。さういふことは嚴肅に研究をしなければならぬ、宗旨宗派の議論だなどと輕々しく思つて居つてはならぬ。宗敎は人間の最も高等なる道義心を支配するものである、宗敎に依つて承認せられる以上は、それ以下の道德、法律、社會、狀態に於て如何なることでも許されるといふことになるのである。己れの永遠の生命を捧ぐるところの宗敎の信頼者に對して、さういふ侮辱が與へられる位ならば、人間の親の頭をぶち割る位のことには朝飯前にやれることになるのである。

丁度社會主義者が天を呪うて、自然の天に對して恨みを列べる。「汝天よ」と言つて呼びつけにして、「汝は我等の祖先を苦めし事幾何なるぞ、大風を吹かして家を倒し、大雨を降らして田地を流し、實に算ふべからざる損害を與へたことを覚えて居るか」といふやうなことを言つて天を恨むが、その天を恨んだ心は直ぐ地上に下るといふと、一國の主權者を呪ひ、階級を呪ひ、種々なる慘忍なる行動をも敢てするのである。その實例は、世界に澤山現れて居るのである。

日蓮聖人はこの點を憂ひて 教の上からも國の上からも嚴密にこれを批判せられて、命にまで代へてこの正義を主張せられたことは、餘程立入つて考へなければならぬ。正義の心を缺いて居るところの出鱈目の批評などを以て、この千古の偉人を觀るべきものではない。

そこで阿彌陀の名に於て、或は大日の名に於て、釋尊に敵對行爲をなしたることの如きは、釋迦牟尼如来の名號との關係をごま化して起つたところのものである。

又いま一つは、サウゴの佛様といつて一つに限ることはないぢやないか、廣く三世十方の諸佛を同じく信心し奉れば宜いではないかといふ思想がある、これが先づ一番公平で、一番太つ腹のやうに見えるけれども、それは又非常な粗雑な頭腦である。三世十方の諸佛總てを信するといふことの如きは、宗教の意識信仰としては殆んど無價値のものとなるのである。宗教の信仰は必ずその中心を定めなければならぬ。例へばこゝに一人の男があつて、「我は總ての女を愛す」と斯う言うた時には、その男には何等の愛といふものが無いことを反對に證據立てることが出来る、我は總ての女を愛す、子供でもお婆でも改者でも偏目でもごんな女でも、女といふものを總てを愛するといつて、平等に愛して居ると言ふやうな者は、女に對して一切戀愛の觀念無き者が始めて言ひ得ることであつて、どうしても總てを愛すといふやうな漠然たることに依つては本當の愛といふものは發生しない。その如くに、總ての佛を敬ふといふ全体の中から中心を取つて、總ての佛と自分の信する中心の佛の關係を明かにして、そこに純潔なる信仰は發生するのである。それ故に總てを愛すといふやうな言葉は非常に純潔のやうであつて、實は無價値のものであることが能く知れるのである。

この問題は最も明瞭にして置きたいと思ふのであるが、諸佛と釋迦如来との關係の如きはこれまでも屢論明したことであつて、小乗の二千餘卷の經々に於ては、横に他の世界に佛ありといふことを認めないのである。原始佛敎といふか、根本佛敎といふものには、西に阿彌陀が居るの、東に樂師が居るといふやうなことは現れて居ない。大体二千餘卷の大部の經卷に亘つて、どれ程多くの説教をせられて居るかわからぬ。阿含のお經は一枚の經文の中にも二回分ぐらゐの説教が出て居る位に、簡潔明瞭の記述方式に依つて出来て居る、二千餘卷の中の説教の數といふものは何萬の説教が入つて居るかわからぬ位數多いけれども、その中にそんな西に佛が居るの、東に如来が居るといふやうなことは一つも説かれない、横に佛といふものを一人も認めないのを以て、これを阿含の教として居る。それであるから今でも暹羅や天竺の佛敎に於ては、お釋迦様の他の名前などを言うたならば、それは婆羅門外道だらうと言つて疑はれる、佛敎と言へば釋迦牟尼の御名に於て信仰をすることに限つて居るのである。基督教はいろ／＼の派に分れ、世界各國に傳道せられて居るけれども、基督の名を忘れて他の者に行くといふやうな流派は一つも無いのである。若し他の名前を言つたならばそれは基督教でないといふことになる。そんな間違つたことを言つて居るのは佛敎だけである、釋迦教でありながら釋迦の名に背き、釋迦の意に反したやうな宗派が起つたといふことは、これは前に言ふ陰謀的の宗派である。恰も日本國民にして皇室に敵意を含む惡逆の態度に等しき行動である。孔子敎の中にも學派は分れて居る、徂徠學であるとか、朱子學であるとか、折衷派であるとか、訓詁派であるとか言つて、いろ／＼の流派は分れるけれども、併し孔子に背いて流派を立てるやうな者は儒學系統の中には一人も無い。釋迦敎の系統の中に釋迦の惡口を言うて宗派を聞かうといふや

うな者が出来たのは、狂人が馬鹿か何とも言ひやうのないものである。そんな親方をすべき筋合は何處にもあるものではない、けれども狂人でも餘計になれば仲間が多いから狂人ではないといふことになるが如く、馬鹿もズツとその仲間が殖えて、五百人の中の四百八十人まで馬鹿が居つたならば、二十人の方が寧ろ間違つて居るので、四百八十人の馬鹿の方が正しいといふ議論が立つのである。であるから多數で決める優秀ナンといふものは實に危ないものである。

今その點に於ては、阿含小乗經が二千餘卷あるけれども、これは時間的に釋尊中心の思想をきめたものである。一通りは三世の諸佛といふものを算ふけれども、三世といつても過去の諸佛は七佛あつたのである、未來の諸佛といふのは長い年數を経てからのことであるから、ごういふ佛が出て來られるかわからぬけれども、未來のことである。この次には彌勒菩薩が佛に成るといふことにきまつて居るが、それはこの位年數が経つたら出て來るかといふと、「五十六億七千萬年遙かなり」と言つて、五十六億七千萬年の後に出るといふのである。如何に氣の永い親爺でも、「今はお釋迦様に縁が無くて教うて貰はなくとも、後から出る佛様を待つて居れば教つて貰へるだらう」と考へたとしても、ごの位待つたら宜いか、五十六億七千萬年待たなければならぬと聽いたならば、「それは些と長過ぎるナ、それではそれはやめにしよう」といふことになつて、彌勒の出現を待たずして釋迦如來に依つて教はれやうと考へることになるのである。又過去の七佛は既に涅槃し給うて今直接我を教ひ給はない。現在に於ては釋迦牟尼佛がまのあたり斯の如く教を垂れて下さつて居るのであるから、さうしてその過去の佛が今のお釋迦様より偉いといふ譯ではない後に居る佛がお釋迦様より偉いといふ譯ではないからして、同じものとしても七佛は涅槃し去つて直接し

得ない。彌勒の出現は遙かなりといふことに依つて、釋尊に渴仰の精神が向ふのである。だから諸佛といつても阿含經で言つたならば三世の諸佛を説いて、さうして釋迦を時間的中心に渴仰するといふことがきまつて居るのである。それを「三世諸佛」と言ひ放して、何處へ行くといふこともないやうな風に漠然と考へて行くのは、これは支那人の頭腦からあゝいふことが出て來たのであらう。支那は大きな國ではあるけれども、何處が中心やらわからない、「くらげ」みたやうなもので、今でも國內の統一を失ひ、結合を失つて居ることは、國際の上に非常な不利な益だといふことはわかつて居りながら、何處が頭やら尻尾やらきまりが附かない、何の爲に騒いで居るのかわからぬ。あゝいふ不統一な、不賢明な頭腦の中からは、何を言ひ出すかわからぬといふことを考へて置かなければならぬ。だから三世諸佛と言つたならば、モウ何處までも三世諸佛ぢやといふやうな譯で、佛敎の中にはあの支那人のだらしの無い頭腦のやうな人が今日でも随分あるのである。お釋迦様のお建てになつた佛敎そのものの中には、そんな種々の弛んだものは無い。そこで阿含小乗經は時間的中心に釋尊を置いて渴仰して居るものであることを明瞭に意識せねばならぬ。それから權大乘の諸經、即ち華嚴經でも般若經でもその他如何なるお經でも、法華經を除き小乗を除いたその他の一切經はこれを權大乘經といふので、一つも残るものはない。佛敎を纏めれば小乗經と權大乘經とさうして實大乘經、即ち法華經、この三つを言へば一切が入るのである。そこでその小乗と法華經を除いたその他の一切の權大乘諸經はごうかといふと、これは空間の中心として釋迦如來を信奉するのである、それは横に佛様があることを説いて、西の方にも佛があり、東の方にも佛がある、南にも北にも澤山の佛があるといふので、十方に佛あることを説いたけれども、この娑婆世界の教主は釋迦如來に

限ると言つて、この空間の廣がりの中心に釋迦如來を立てたのである。佛には必ず世界がある、藥師如來と言へば東方淨瑠璃世界の教主である、阿彌陀如來と言へば西方安樂世界の教主である。斯ういふ風に世界をきめてそれが混線しないやうにしてあるのである。釋迦如來と阿彌陀如來を混線するのは非常に間違つたことである、阿彌陀の世界は十萬億の佛國土を過ぎて遙かの向ふにあるとお經に説いてある。一人の佛様の世界といふのはどの位の大きさであるかといふと、三千大千世界を以て一佛化境となすといふのは佛敎の通則である。三千大千世界といへば須彌四洲といつて印度の傳説に依つて、大きな須彌山があつてそこに日月が廻つて居る、そこに東西南北に四つの國があつて、南の方を南閻浮提といふ、これを地球と言つて居る、東には東弗婆提、西には西羅耶尼、北には北閻單越といふ四つの國がある、マア小さく言へばこの地球であるけれども、地球はこの大きな組織の中の南の方の世界である、これだけの世界を有つたものが、それが百億の須彌、百億の日月、百億の四洲集つたものを三千大千世界といふのである、それが一人の佛様の御領分だといふ。小さく言うても地球のやうなものが百億ぐらゐ集つて、一人の佛の世界となるのである。その百億の地球を有つて居る佛様が十萬億ある、その十萬億の佛國土を過ぎて向ふの方に安養世界があるといふのであるから、これは遠いとも何とも實にえらいことである。一佛の化境が三千大千世界であつて、それが十萬億の佛の世界を過ぎて西に阿彌陀如來が居ると説いたのである。

それ故に一切經にはいろいろ説かれるけれども、娑婆世界の衆生の爲の教主としては釋迦如來よりほかは無い、我等衆生の父は二人と無い、明かに教主釋尊を以て我が父となすのである。この「父」といふ觀念は道德宗敎の一番大事なところに現れて來るのである。儒敎で言うても「父子親有り」といふ言葉があり

「孝を以て百行の本と爲す」といふ。それは人間の道德發生の精神状態を見たならば、親の有り難いといふことが一番大切なのである、その他の事は説明しなければわからぬけれども、始終慈愛を與へられて育て貰つたのであるから、親の有り難いといふのは直ぐに心が動くのである。我々日本人の天子様に對する情操は、「義は君臣たりと雖も情は父子の如し」というて、我々は天子様を父として奉戴する所に、世界に秀でたる日本の國体が存して居るのである。基督教が誇りとして居るのも、天に在ます我等の父といふ言葉で言ひ現して居る、彼等は口を開けば直ぐに「我等の父よ」「父なる神よ」と叫んで居る。佛教徒は我等の父よと言ふ時分に誰を對手に言ふのか、「それはマア一つ相談しなければ澤山あるものですからちよつときまりませぬ」斯ういふことになつては、宗教道德の大事な統一が無くなつてしまふのである。父が二人あるといふやうなことを考へて居つたならば、どうしてもその子供の道德感情は發生しないのである。「人間は父が一人だといふやうな、そんな料簡の狭いことではいかぬ、太郎兵衛も孫兵衛も皆んなお前の親だ、忘れるなよ」といふやうなことを始終言うて聽かせて居つたならば、それは人間の徳性の源を打ち壊してしまふものである。子供の時から左様なことで大きくなつて行つた者は、到底立派な人格をつくることは出来ない。

今の佛敎が丁度それと同じ失敗に陥つて居るのである。觀音様へ行かうか、地藏様へ行かうか、お藥師様へ行かうか、何處へ行かうかと言つて、「何處へ行かうか、兎に角自分が信心をするのだから悪い事は無からう」と言つて居るけれども、道德宗敎は統一に歸着しなければならぬ。儒敎の道德に於て言うても「一以て之を貫く」といふやうに、必ずや一に歸着しなければならぬ。彼の塩原多助が邪見な自分の母親

に向て言うたやうに、天地廣しと雖も親は二人と無い、親は取り換へることが出来ませぬと言つて居る。これは出来損ひの親だから一つ取り換へてやらうかというてもそれは出来ぬ、だから出来損うて居らうが何であらうが、その親を絶對として孝養を盡さなければならぬ。「忠臣は二君に仕へず、貞女は兩夫に見えず」といふやうな具合に、二つにならぬ所に純潔の精神があるのである。それをその道德宗教の根本を拜する佛敎が、いきなり二つでも三つでも十でも構はぬといふやうなことを言ひ出したといふのは大間違ひである。

お釋迦様はチャンとその事を御承知になつて居るからして、權大乘經に於ては他の世界に佛を説くと雖も、我が娑婆世界に於ては釋迦牟尼佛に限るといふことにきまつて居る。そこで「我は汝等の父なり」と仰しやるので、決して他の佛が父であるとか、この世界の教主であるといふことは仰しやらない。これは一切經の通則と申して、その通りにきまつて居ることである。「聖敎の通判なり」と申して原則である。斯ういふことをごま化すといふやうな坊主や信者があるならば、丁度國家で言うたならば憲法を蹂躪すると同じことである、國家の憲法でも護憲運動が起つてやかましい、尤も世間の護憲運動は内閣の組織がどうとか、研究会がどうとか言つて居る、あゝいふことが憲法に觸れて居るかどうかわからぬやうなものだけれども、日本の憲法に於て天子様を二人でも三人でも、その時の都合で五人ぐらゐにしても宜いといふやうなことを言うたならば、憲法の中の一番大切な根本綱領を破壊する所の違憲であるからして、その場合に憲法を擁護する者は、日本の天皇は一人でなければならぬ、高御座にお登りなさる方はいくら皇族の方か澤山お在りになつてもたゞ御一人であらせられる、斯ういふことを明かにする所に、憲法の根本を擁

護する所の護憲運動が起らなければならぬ。それをボカンとして居るやうな者ならば話をするに足らぬ。佛敎に於ては聖敎の通判として、一佛の化境に二の尊號なしと云ふが大事なことになる、その事を力説した者が即ち日蓮聖人である。

それ故に權大乘の諸經は空間的中心として釋迦如來を立てられた、これを法華經に來つて絶對的中心として、過去の七佛といふのも、往ては自分の身を分けたのであるといふ「分身」といふことを明かにした。本來自分は久遠の根本から在る佛で、それがいろ／＼と身を現して來たのである、根本久遠の本佛がこゝに出現して居るのである、今後いろ／＼現れて來るのもこの本佛の出現である、横にいろ／＼と現れるのもこの本佛の出現であるといふことを顯した。これが法華經の書量品である、「我れ佛を得てよりこのかた經たる所の諸の劫數、無量百千萬億載阿僧祇なり」といふ久遠の壽命を説き、それから過去にも現れ、今日にも現れ、十方法界にも身を分けて居るといふことを最も詳細に徹底的にお説きなされたものが法華經の書量品である、少しも迷ふ所は無い。さうしてこれを以て一切經を綜合歸一されたのである、小乘に於て時間を中心に釋尊を立てたのを、その時間を貰いて本佛釋尊の化導であると言ひ、權大乘に於て空間を中心に釋尊を立てたのを、絶對的に盡十方に亘つて本佛釋迦如來の化導である、本佛は天の一月、諸佛菩薩は萬水に浮ぶ影なりといふことを以て時間空間を統一して、始めてそこに佛敎信仰の歸一が明かになつて來たのである。

その事はモウ屢々申上げたことであつて、今日の問題ではないのであるが、左様にして佛の本體を觀て根本の問題が定つたならば、第二に起るのは名前の問題になつて來るのである、大義名分と申して、その

根本がきまつたならば、今度は名號が極めて大切になつて来る。能く考へれば名前などはどうでも附けたら宜いのである、名前が惡ければ不幸が来るとか、さういふやうなことを言ふのではない、名などはどうでも宜いやうなものであるけれども、「日本」なら日本といふ國は名前がきまつて居るのである。これを勝手にいふ／＼な名前を使つたならば、非常な間違ひが起るし、そこに大事な觀念が無くなつてしまふのである。自分のお父さんが孫兵衛といふ名であるならば、孫兵衛の名に於てこれを大切にしなければならぬ。孫兵衛が自分の親でありながら、權兵衛が有り難い、八兵衛が有り難いと言つて居つたならば、そこに非常な間違ひが起つて来る、名は大切なものである。凡そこの名前を混亂すれば、直ぐに事實が混亂されて一切は皆な壞れるのである、名を輕んずるといふことは間違ひである。それ故に聖人の學に於ては名を正すのである、老莊の學といふものは、老子などは名を捨て、さうしてその奥に入らうとするが爲に、いろいろの間違ひが起つた、であるから日本ではこの老莊の學は表向には用ひないのである。「名」とすべきは常名にあらず、仁義といふやうな名前を附けるのも間違つて居る、「道の道とすべきは常道にあらず」眞の道は曰く言ひ難きものである、善いも悪いも何とも言ひ難き、玄之又玄、至妙なるものであるといふやうな風にして、名前を否定する學問であるから、ちよつと根本の理窟には合ふやうであるけれども物が紊れて来るのである。「何も日本と言はなければならぬ」とは無いちやないか、一番善い名前を考へさへすれば宜い」と言つて、日本といふ名前を輕いことに考へた場合に於ては、日本人の精神の統一が破れてしまふ。「お前は何處の國の者ぢや」「何處の者といふことはない、曰く言ひ難き者ぢや」といふやうなことを言つたならば、そこに非常な間違ひが生ずる、やはり「我は日本人なり」「日本の名に於て」といふ

所に、命に代へても守らなければならぬ必要が起つて来るのである。それを禪宗の學問や宋の學問といふものは物の半分しか考へないから、「名前などはどうでも宜いぢやないか」「へー」といふやうなことを言つて居る、これ皆支那人の頭腦から出て来る思想である。日本民族のやうに裏も表も看透したところの健全なる思想の中には、あゝいふ不規律なものを許すべきものではない。釋迦牟尼の教は決して名分を紊ることを許さないのである。

それ故にこの名前に就ての考を明かにして置かなければならぬが、釋迦牟尼の御名は自然に定つたところの名である。即ち悉達太子が御降誕なされた迦毘羅衛城の王様の御家が釋迦族であつた、「釋迦」といふはその王様の家の名である、併しその意味はどうかと言へば釋迦は「能仁」と譯してあるが、この上も無い親切のことを申したのである、仁の最も能く整うた意味を言ふのである。牟尼は「寂默」と譯して、無駄な心がスツカリ鎮まつて、ガヤ／＼したやうな雜念が無くなり、心靜かに實相を味ひ、心靜かに慈悲の思ひに満つることが出来るのである。吾々は實相を考へようとしても下らぬ考が出て来る、親切にものを考へようとしても直ぐ迷ひが出て来る、親が有り難いといふことを能く考へて居らうとしても、そこへ豆腐屋が喇叭を吹いて来れば、「ア、豆腐屋が来たナ」と思つて考が逸れてしまふ、犬がワン／＼と吠えれば、そのワン／＼の方に考が飛んでしまふ。さういふ無駄な散漫な精神が無くなつたのを牟尼といふのである。「ア、この子が可愛い」と思つたならば、豆腐屋が来やうが犬が吠えやうが、そんな事に気が散らないで、ズツと貫いて可愛いと考へて行く、これを「能仁」「寂默」といふのである。一切衆生を憐んで、これを救はずんばあるべからずとお考へなされた大慈大悲の精神が何ものにも動搖されずして、い

つものこの精神に満ちてお居でなさるのを「釋迦牟尼」と申上げるのである。それが自然に定まつて居つた名であるけれども、洵に御人格に相應しい立派な御名であることを知つて居らなければならぬ。サウ知つて居ると、このお名前に就ての考は餘程有り難くなつて來る。「釋迦牟尼」といふことは、大慈大悲のお考がズツと續いて居つて外へ氣が散らぬといふことである。

それから「如來」といふことは、これは眞實その儘の御人格といふことで、少しも間違ひの無い一切の完成されて居るところの御方が、吾々に救ひを與へんが爲に人間の世の中にお出で下さつたといふことである。一番完全なる偉い方が、こゝにお出でになつて悉達太子としてお生れになつた、さうして人間の姿を以て教を垂れて下されたといふことを「如來」といふのである。この人間の世にお出でにならぬければ「如來」とは言へぬのである、阿彌陀如來などといふものは本當は如來ではない、人間の世に少しも來ないのであるから、阿彌陀不來である、如來といふのは來んければいかぬ。來ないでも來たのぢやといふやうなことは、これは支那人の言ふことである。「來ても來んのぢや、來ないでも來たのぢや」といふやうな變な事はかり彼等は言うて居る。坊主の頭腦は大體支那人に捏ねられたやうなことになるから、わが國からぬ。淨土宗の坊さんでも、禪宗の坊さんでも、今でもまだ大抵は支那人の頭腦ぢや、日本の國家に適合する宗教如何、佛教の眞實義如何といふやうな重大なる問題に當面して、これを解決するところの熱心を有たないで、たゞ支那人の言ひ草の精神を嘗めて、何百年でも何千年でも同じやうな誤りを續けようといふのが、今日の日本佛教徒大部分の状態である。

釋迦牟尼如來のお名前の意味は無論奪いことであるが、そのお名前が自然に定まつて居た。一切經何處を見ても、「我は釋迦牟尼如來なり」と仰せられて居る、阿含經であらうが、權大乘であらうが、法華經であらうが、一切經皆な釋迦牟尼といふ名である。又佛教徒の全體に亘つて釋迦牟尼の名前を否定する者は無い、佛教をお説きになつた佛は誰だと言つたならば、それは阿彌陀様だのといふやうなことを言ふ者は無い、たゞ眞言だけが少しばかり大日如來が説法をしたといふやうなことを言ふのである、或はさうではないと言つて見たり、さうだと言つて見たり、自分みづからマゴ／＼したやうなことを言うて居る。併ながらそんな事は世間へ通用しないことである。一切の佛教はたゞ一人の釋迦牟尼佛のお説きになつたことである、それ以外のものを混入してはならぬから、必ずお經の初めには「如是我聞一時佛住何處々々」と斯う書いてある、是の如く我聞き、ある時佛何處々々に住し給へり」といふのである。この佛といふのは釋迦如來に限つて居る、その住す所は靈鷲山であるとか、祇園精舍であるとか、波羅奈鹿野園であるとかいふやうに、必ず處が書いてある、一切經を抜けて見たならば必ずその事が出て居る、「一時佛住」といふことが無ければ偽のものである。一切經は釋迦如來の御口より出ないものは探らぬといふことが、お經の初めに原則としてきまつて居る。「お釋迦様が説いたのではない、他の者が説いたモツと上等なものぢや」などと言はれて、「さうですか」と言つて耳を藉すやうなことは非常な間違ひである、そんなことを佛教に於て言ふべきことではない。佛教徒が釋迦よりも偉い者が出たと言はれて、「さうかな」といつて耳を藉すからならば佛教には來ないが宜い。基督が偉いと思つたら基督教へ行けば宜い。一切の出現者の中に於て釋迦牟尼を最尊無上なりといふことを前提として佛教徒たることを得るのである。然らば何故いろ／＼の名前が現れたかといふと、これは釋迦如來が衆生教化の方便の上に應用された場

合が多いので、いつさういふ佛が出たとか、何處にどういふ事があつたとかいふ場合に佛の名前を説かれるけれども、併しそれは方便の上から出たことであつて、實際は釋迦如來の働きにほかならないものである。その根本を明かしたものは法華經の壽量品である、法華經の壽量品には明瞭にこの名前の事が解決されて居る、處々に自ら名字の不同、年紀の大小を説く、而もそれは皆な釋迦牟尼佛の働きてあるとお説きになつた。

處處自説 名字不同 年紀大小

とあつて、國が違つて居つても、名前が違つて居つても、出た年代が違つて居つても、それは衆生教化の方法に依つて自ら釋迦牟尼がいろ／＼と説いたのである。それは方便として解釋しても宜し、出たとするならば我が釋迦牟尼が働いて出たのであつて、他の者が出たのではない、名前が違つても他の佛ではない、我が説いたのであり、我が働いて出たのである。

斯様に法華經には非常に能くこれをお説きになつたのであるが、この名前が一切經に於ていろ／＼違つて居ることの解決は法華經ばかりではない、他のお經にもこの事は説いてあるのである。華嚴經の如來名號品第七に斯うある。

爾の時に文殊師利菩薩摩訶薩は、佛の威力を承け普く一切の菩薩衆會を觀じて是の言を作さく、諸の佛子よ、如來は此の四天下の中に於て、或は一切義成と名け、或は圓滿月と名け、或は師子吼と名け、或は釋迦牟尼と名け、或は第七伽と名け、或は毗盧遮那と名け、或は瞿曇氏と名け、或は大沙門と名け、或は最勝と名け、或は導師と名く、是の如き等の其の數十千なり。(華嚴經要義卷七、一九六頁)

さういふ名前を拾へばなんばでもあるけれども、皆なそれは一人の釋迦牟尼佛の名前を變へていろ／＼言うたに過ぎないものである、やはり壽量品の「名字不同年紀大小」の經文の意味で、華嚴經の如來名號品の中に、特に釋迦如來の名號に關して説明をせられて居る。このお經は今更出來たものではない、最初からあるのである、宗旨でも開くぐらゐる者は無論これを一遍は見なければならぬ、見たら能くわかることナンである、それをこま化すといふことは甚だ宜しくない。阿彌陀如來といふやうなことがあつたからといつて、それは釋迦如來よりほかの佛ではない、さうしてだん／＼推して行けば、淨土宗でも眞宗でも「釋迦彌陀一體」といふことをどうしても言はなければならぬ、責められれば一體といふ議論へ逃げ込まなければならぬから、釋迦彌陀一體などと言ふのである。それを素人に言ふ時分には違つたやうなことを言つて、「お釋迦様ではあかぬ」、斯う言ふのである。眞言宗でも「釋迦大日一體」といふ所に話は落ち込んで行く、一體ならば上だの下だのといふやうな議論は起る譯が無い、大體さういふ謀なみの宗旨である。であるから釋尊の降誕會には各宗の坊主が寄つて日比谷公園で花祭をやつて、釋尊の降誕を祝して目出たい／＼と言つて居るが、寺へ歸つて來たら「お釋迦様などは逆も吾々を助けることは出來はせぬ」といふ説教をして居る、斯ういふ表裏のある行動を彼等は執つて居る。宗教といふものはさういふ二股のものであつてはならない、釋尊の御名と諸佛の御名との關係如何といふ問題が出たならば、嚴意にこれを解決すれば宜いのである。西洋の基督教などでもいろ／＼問題は出るけれども、この支那人の頭腦から來た佛敎の解釋のこま化しみたやうなことは決して問題とせられない。何處までも合理的に研究するものは研究し、解決すべきものは解決し、熱心にその正統の教義を發揚せんとして居る。今の佛敎の坊主みたやうにごつ

ちでもこつちでも構はぬ、少々ばかりお經の文句を覚え込んで、お賽錢さへ上れば宜いと言つて欠伸をして居るやうな、そんな宗教がどうして發展するものではない、實に怪しからぬ態度であると言はなければならぬ。

だからしてこの華嚴經の名號品の如きは、佛教各宗の人が研究をして意見を發表しなければならぬものである、たゞ黙つて引つ込んで居るの如くなつて居るといふことは不都合である。壽量品の名字不同年紀大小の經文に對しても意見を言ふべきものである。親鸞上人なども非常に狡猾ことをやつて居る、「久遠實成の彌陀」などと言つて、お釋迦様と阿彌陀様は同じものであるから、お釋迦様の久遠實成は阿彌陀様の上を持つて行つても差支ないといふので、久遠の彌陀といふやうなことを言つて居る。さういふことは釋迦如來の名と阿彌陀如來の名との關係をごま化して、素人のわからぬやうにしてしまつて居るのである。併ながらその内容は前に言ふ通り釋迦の名に於てのみ佛教は開かれたものであるから、これをどの宗旨が名前を變へるといふことは出来ない、法華宗だけが釋迦如來と言ふのではない、佛教徒は皆な釋迦如來でなければならぬ、一切經の教主は一人の釋迦如來でなければならぬ。

さうしてこの釋迦如來の御名が一切衆生を救ふといふことは詳しくお經に出て居るのである。法華經の「分別功德品」に於ては、

佛の名十分に聞へて、廣く衆生を饒益したまふ。

この佛の名といふのは壽量品に於て顯本したる本佛釋迦如來の御名である、釋迦如來の御名が十方世界に響いたといふことになつて、釋迦如來の御名に依つて廣く衆生を饒益するのである、他の佛の名前などを

藉るのではない。方便の教の場合には彌陀だの藥師だのと言ふけれども、實際は十方世界に於て釋迦牟尼の御名に依つてのみ衆生は救はれるのである。それ故に「神力品」に於ては、空中に聲あつて釋尊を讚歎せられた時、十方の世界よりして娑婆世界の方へ向つて皆な掌を合せて南無釋迦牟尼佛と申したことが説いてある。

彼の諸の衆生虚空の中の聲を聞き已つて、合掌して娑婆世界に向つて、是の如き言を作さく、南無釋迦牟尼佛、南無釋迦牟尼佛と。

有名な空中摩訶聲の經文である。このやうに十方世界より娑婆世界に向つて掌を合せて居るのである。こちらから他の世界に向つて掌を合せるといふやうなことは、釋迦教徒ではない、娑婆世界の衆生が安養世界に向つて掌を合せるとか、淨瑠璃世界に向つて掌を合せるとかいふことは、抑々中心が逆になつて居る。釋迦如來がこの娑婆世界に出られて佛法を立てられたのであるから、十方より娑婆世界に向つて南無釋迦牟尼佛といふのが當然のことである。さもなければ釋迦の「德」といふものは無くなつてしまふ、衆生を救ふ力が無くなつてしまふのである。「妙音品」に於てもその意味は能く説かれて居る、東の世界から妙音菩薩が娑婆世界に向つて來る時分に、

汝能く釋迦牟尼佛を供養し、及び法華經を聽き、並びに文殊師利等を見んが爲の故に、此に來至せり。東の世界からも釋迦如來を慕うて來るのである、西の世界からも釋迦如來を慕うて來るのである、その事が法華經の思想である。而して最後の「勸發品」に至つては、釋迦如來の御名に依つて法華經が役立つことを説かれて居るのである。

若し是の法華經を受持し讀誦し正憶念し修習し書寫することあらん者は、當に知るべし、是の人は則ち釋迦牟尼佛を見たてまつるなり。

熱心に法華經を信じ且つ修行すれば釋迦牟尼佛に會ひ奉ることが出来るのである。それ故にこの法華經を讀む者はまのあたりお釋迦様の御口からこのお經を聴くやうに思へ、自分が「自我得佛來」と讀んでも、それは自分の聲で讀んで居ると思つてはいかぬ。「我れ佛を得てよりこの來經たる所の諸の劫數」……と讀んだならば、お釋迦様が今さういふ具合にお説教をなさつて居るのだと思へ、自らお經を讀みながら佛の御口よりこの經典を聴くが如く思へ。それで始めて有り難くなつて來るのである。「我佛を得てより」と讀んでもそれが譯の事やらわからぬ、狐の前や狸の前で「自我得佛來」……とやつて、それが有り難いナシといふのは皆な婆羅門のやり方である。佛敎は清き人間の意識を本にして、正しく筋立つた敎でなければならぬ、そんな陀羅尼聲を擧げて譯のわからぬ「デビム」ジャブムとやるやうなことが決して佛の敎ではない。婆羅門の輩といふものはそんな事ばかりやつて居つた、それを改良して起つたのが釋迦如來の佛敎である。あんな「デビム」「ロケ」といふやうなことで済むならば釋迦如來の説敎は要らぬ、あゝいふことが法華經に出て居るからといつて、何もあれを總ての人に奨めたものではない。あれは婆羅門の神がやつて來て、私はほかに何も知りませぬから、自分の知識を以て敎を宣傳する力も無く、佛法をお助けすることも出来ないけれども、たゞ私等の仲間には私の顔が賣れて居ります、さうして私の聲を聴いたならばその奴等は皆な萎縮つてしまひます、丁度破落戸の親分みたやうな者が信者になつたやうに、佛法の宣傳を妨害する爲に破落戸のやうな奴が錢でも貰つてやつて來て妨害をする、その時分はその親分

が行つて「コラ貴様達何をする」と言ふやうな譯である、さういふ時のお役には立ちますからといふので、彼等がこの陀羅尼といふものを説いて居るのである。無論この敎を本當に宣傳する時分には擁護する力といふものは要るのである、日蓮聖人の時分でも、工藤吉隆が天津の城主として日蓮聖人を擁護して小松原に於て討死したが如く、或は四條金吾が龍の口に於て殉死せんとしたが如くに、擁護者といふものは要るのであるから、そこでその場合にあゝいふ「デビム」といふやうな言葉が出て來た。これは佛敎が獎勵したのではない、破落戸の親分が來て、「私はほかに御用を足すことが出来ませぬから、この法華經の宣傳を妨害するやうな奴が出たら私が顔を出してコラツと言へば引つ込んでしまひます」といふやうなことから言つたので、誰も彼も破落戸になつて變な聲を出せと奨めたものではない。せめて自分はさういふことを以て誰も佛敎を擁護しようといふ、不良なる者までも改過遷善して佛の敎に來つたといふことを證明するのである。それを真似して尊いお自我偈や佛様の有り難い方へ行かすして、鬼子母神様の前へ行つてその口真似をして「デビム」「ロケ」「タケ」といふやうなことがばかりやつて居る。モウ大分久しくやつて居るものだからあんなことを善いやうに思つて居るけれども、本當の佛法の研究から言つたならばあゝいふことは價値有るものではない。

だから法華經を信するといふに於ては、釋迦牟尼佛を渴仰する精神に結びついて、このお經の一節々々の聲が釋尊の御口から敎を聴いて居るやうに感じて行かなければならぬ。随つて「南無妙法蓮華經」と唱へるのも、これは法華經を結要したのであるから、廣く法華經を讀む代りに、題目の五字七字に纏めてあるのである、それ故に「南無妙法蓮華經」の聲が自分の耳に響いた時は、お釋迦様の御聲としてこの尊とき

教が興へられて、それを自分が守つて行き居るのぢやと思つて、直ぐにお釋迦様を考へ出す所に信仰があるのである。お題目は風來で何處へでも行くと思つたら大變違ふのである、自分で勝手に拵へたお題目で、それが狐の前でも狸の前でも何處へでも持つて行けると思つたら大間違ひである。釋迦如來の法華經の教を結要したものである、であるから釋迦如來のお教ひが法華經に現れて居る、それを纏めて「南無妙法蓮華經」にして居るのである、そこに法華經は釋迦如來と離れることが出来ぬといふことがわかるのである。釋迦如來の教から釋迦如來の智慧、慈悲、救済の方法が現れて居る、それを結晶して「南無妙法蓮華經」と纏めて居るのである、だからお釋迦様と我等の間を繋いで居るものが法華經である。

そこで他のいろいろの佛の名前は、これは今も申す通りに釋迦如來のお名前がいろいろに現れて居るだけのものであつて、その中に於て最も勝れて居るといふのは「毘盧遮那如來」といふのであるが、その毘盧遮那が華嚴經にも「或は毘盧遮那と名く」とあつて、釋迦如來と毘盧遮那とは一つであることが説いてある。前に引いた名號品の中にも「或は釋迦牟尼と名け、或は第七仙と名け、或は毘盧遮那と名け」とある、又法華經の結經觀普賢經の中にもハツキリ出て居る。

時に空中に聲あり、即ち是の語を説く、釋迦牟尼佛を毘盧遮那遍一切處と名けたてまつる 其の佛の住處をば常寂光と名く、常波羅密の攝成する所の處なり。

釋迦牟尼佛を毘盧遮那遍一切處と名けたてまつるといふのである、「毘盧遮那遍一切處」といふのは法身如來と譯して居るが、これは「遍一切處」と同じ意味で、「毘盧遮那遍一切處」といふのは、毘盧遮那の梵語と、譯した支那語とを列べて言つて居るのである、「一切の處に遍し」といふ意味で、前に言ふ通り空間で

言へば一切の處を盡して遍しといふこと、時間の方から言へば一切の時間を貫いて居るものであるから、三世に貫き十方に遍く、前に申した壽量品の本佛顯本の如きはその儘「遍一切處」であり「遍一切時」である。何も殊更に名けるも名けないも無い、本當の毘盧遮那の意味は壽量品にあらざれば現れて居ないのである。大日經に言ふところの毘盧遮那の如きは何の値も無いものである、山や川や一切のものがそこにあるといふやうなことは毘盧遮那も何もあつたものではない、これは宇宙の自然の儘である。佛教で使ふところの遍一切處といふことは、何處でも犬や猫が居るといふやうなことが何もあり難いのではない、絶対無上の佛のお働きが、空間を貫き時間をも貫いて、遍一切處、遍一切時に於て大活躍を下さるといふことが有り難いのである。弘法大師の言つた大日如來などは六大即大日といふのである、六大といふのは地水火風空識を言ふのであるから、何處へ行つても土があり、火があり、水がある、それは大日だといふ、そんなものが何處にでもあつた所が何でもないぢやないか、左様な人格を忘れた地水火風空などといふやうな、空氣が何處にもありますといふやうなことが、宗教に何の關係があるか、實にくだらないものである。壽量品に現はれたる人格の如來が三世十方に大化導をお興へ下さる、それが眞に宗教的に言ふ「毘盧遮那遍一切處」である。

それに釋迦牟尼佛を毘盧遮那遍一切處と名けたてまつるといふことは、たゞ言葉ではない、法華經に依つて現れたそれが眞の法身である、眞の絕對者である。譯のわからぬ支那人見たやうな頭腦でやるから、言葉を少しばかり捉へて大日が毘盧遮那ぢや、釋迦は應身ぢやと言つて疑言ばかり言うて居る、モット本格に佛教を研究して見たならば、そんな皮相論に捉はれて、符牒みたやうなことはかり言うて實質を忘れ

るやうなことは無くならぬであらう。

釋迦牟尼佛の御本体に於て御名に於て、理想的な完全な説明を完成する時佛敎の教義は纏りがつくのである。それを横合から混せ返すやうなことを言つて、お釋迦様が有り難いやうに言うて見たり、又躑躅ばすやうなことを言うて見たり、洵に一進一退何をやつて居るのかわからぬやうな坊主は支那人の思想を承け繼いだ出来損ひである、大日如來が釋迦如來より偉いなごといふことも、これは全く混せ返し議論である、大日經といふお經を放けて見れば事は頗る明瞭である、釋迦如來の御徳がお日様よりも尊いといふ所から「大日」と言つたのである、天に出て居る日は闇を照すけれども、形の上を照すのであつて、人の心の中の闇を照すことが出来ない、釋迦如來の御徳は日の照し得ない人間の心の中の闇をも照し下される、斯ういふやうに光明を輝し給ふ點に於ては日よりも勝るといふので「大日」と言うたのである、即ち釋迦如來の御徳を讃歎する言葉である。阿彌陀如來の「無量壽」といふやうなことも、壽量品に於て久遠實成の本佛が顯はれて、それが始めて本當の「無量壽」である、盡十方に大活躍をしてこそ眞に「無量壽如來」である、阿彌陀の無量壽とか無量光はたゞさういふ字を使ふだけで、少しもその實質は無い。壽命にしたところが十劫正覺の如來といつて、この間までは法藏比丘であつたといふのであるから、十劫正覺といふものがどうして無量壽といふことが言へるか、安養世界に世界を控へてごだけの範圍を救ふといふのか、一向さういふことも説いてないものであつて見れば「無礙光如來」といふことは言へない。それは有限的に言へば何でも言へるけれども、眞の「無礙光」といふのは盡十方世界を救ふものでなければならぬ、眞の「無量壽」は三世を貫くものでなければならぬ、十劫正覺などと言ひながら無量壽と稱する

が如きは、天台智者大師が言うて居るが如くに、阿彌陀の無量は「有量の無量」である、たゞ無量といふ算盤の桁があるのである、「無量無邊阿彌祇」といひ、有限の算盤の桁の無量無邊だといふことになつて居る、有限的に無量といふことは言へるけれども、「無限の無量」といふことは言へないと天台も解釋して居るのである。さういふことも古來の問題になつて居るのであるから、たゞ「無量壽」といつてごま化すやうなことを言はずに、眞の三世を貫く無量壽ならば、壽量品の顯本の本佛の如く、始め無く終り無き常住實在の哲學的の論證を経なければならぬ。それが法藏比丘であつて、四十八の願を立て、この願成せずんば正覺を取らずといふことがある以上は、彼は佛でなかつた、法藏比丘といふ坊さんである、世自在王如來の前に願を立て、五劫超載の修行をやつて、それから遂に佛になつたといふので、始めのあるものである。始めあるものは終りありで、有限の如來である、それ故に淨土の三部經の中に、彼は成佛してより凡そ十劫を経たりと明かに説いてあるのである。凡歷十劫といつて、十劫正覺の如來であるといふことは經文に明かなる所である。これを「久遠實成の彌陀」といふやうなことを言ひ出したのは、親鸞上人がたゞ勝手に言ふのであつて、お經に證據は無いことである、さうしてその久遠實成といふことも、その意味が徹底して居るものではない。

であるからさういふやうな阿彌陀の名前に依つて「無量壽」といつたところが、それは「壽量品」に現れた本佛釋迦如來の上に出づるものではない。本佛釋迦如來は阿彌陀經にいふ無量壽くらゐのものではない、始め無く終り無き久遠實成の如來であるから眞の「無量壽」である。左様に大日と言はうが、無量壽と言はうが、或は藥師と言はうが——「藥師」といふのはお醫者様のことである、お釋迦様が衆生の病を

蓋すことを樂師と申すのである。いろ／＼な左様な佛の名前などを皆な容れても釋迦如來の御徳に於て缺くるところは無い、そんな名前前の切れつ端に迷ふ必要は無いのである。一切の佛名は釋迦如來の御名に於て統一されて居るのである、華嚴經の名號品に於ても、如來の名號は釋迦を中心にしてどのやうな名前でも皆な一つになるやうになつて居る。壽量品に於ては釋迦が「名字の不同、年紀の大小」を説くと仰せられて、結局は釋迦に歸着しなければならぬのである。觀音經の中に於ても、この佛の御名は唱へること

に於ては「南無釋迦牟尼佛、南無多寶佛等、南無十方分身の釋迦牟尼佛」と申して居るのであつて、第一に釋迦牟尼佛に歸敬して、佛の世界が幾らあつても、その名前が幾ら違つて居つても、それは皆な釋迦の名前に戻して「南無十方分身の釋迦牟尼佛」といふのである。阿彌陀でも樂師でもそれは假の名前で、本當を言つたならば南無十方分身の釋迦牟尼佛である。それを今度纏めて一つ言へば宜いのである、「南無釋迦牟尼佛、南無十方分身の釋迦牟尼佛」斯うある、けれども、この十方分身の釋迦牟尼佛も一體の身を分けて働いて居る、阿彌陀とか樂師とかいふものは分身の釋迦牟尼佛である、それは本體の釋迦牟尼佛に依つて「南無釋迦牟尼佛」と歸敬した時には皆な人つてしまふ、二つ言ふ必要は無い、「南無釋迦牟尼佛、南無十方分身の釋迦牟尼佛」と分けて言はなくても宜いのである。さういふ所が大事な意得である、それをだん／＼分けて十方分身の釋迦牟尼佛が別々になつて、樂師がどうぢや、阿彌陀がどうぢやといふやうな分裂した佛敎の解釋は、甚だ間違つたことである。

さうしてお釋迦様の名前はそれ儘一切衆生を教化するところの力があるので、先に『分別功德品』にあつたが如く、佛の名十方に聞えて廣く衆生を饒益するといふのであるが、法華部の『大法數經』の中にも

この意味が能く説かれて居るのである。

若し菩薩の名を聞く者あらば、能く衆生の三種の毒箭を除かん、況んや世尊の名號功德を稱して南無釋迦牟尼と言ひ、若しくは釋迦牟尼の名號功德を稱せば、能く衆生の三種の毒箭を抜かん。

(大藏經要義、卷一、三八二頁)

釋迦如來の御名前、御功德を讃め奉り、或は南無釋迦牟尼佛と唱へ奉る者は、如何なる衆生でも三種の毒箭といつて貪慾、瞋恚、愚痴の煩惱の根本を除いて救はれることが出来るのである、南無釋迦牟尼佛の御名に依つて、名前を唱へることに依つて斯様な功德を得るといふのである。

ハ、釋迦如來と題目

そこで然らば何故日蓮聖人は「南無釋迦牟尼佛」と唱へしめずして「南無妙法蓮華經」と唱へしめたか、それが爲に非常な混亂を生じ面倒を生じて居るのは事實である、それ故に「南無釋迦牟尼佛」と「南無妙法蓮華經」との敎義上の關係を明かにしなければ、日蓮敎學上の葛藤を結束するに就て非常な障害があると思ふのである。この事は自分としては屢々お話ししたことであり、既に蓄音機のレコードに吹き込んだ文章の中にもその事は詳しく言うて居るのである。

本佛の慈悲と我等の信仰とを結合する其處に、南無妙法蓮華經と唱へしむるものである。南無妙法蓮華經は佛よりすれば救ひの綱であり、我等の信仰はその救ひの綱を握る手であります。歩々念々本佛を渴仰し、佛子の自覺に立ち、救ひの綱を放さず南無妙法蓮華經と唱へ、その法悦の中より願行を立

て、立正安國皆歸妙法の大目的に向つて進むのが、佛教信仰の歸結であります。

といふことを吹き込んである、この「南無妙法蓮華經」は本佛よりすれば救ひの綱であり、我等の信仰はその救ひの綱を握る手である、歩々念々本佛を渴仰して救ひの綱を握る所に南無妙法蓮華經と唱ふるのである」といふ、この題目を唱へるそこにお釋迦様の感應を仰いで居る、この關係が最も大事なのである。釋迦如來は母親の如く、南無妙法蓮華經は乳房の如く、釋迦如來は良醫の如く、南無妙法蓮華經は良藥の如く、釋迦如來は雲の如く、南無妙法蓮華經は雨の如く、總てその關係は經文、御遺文の上に頗る明白に相成つて居るのであるけれども、永い間お釋迦様を忘れさせてお題目を唱へた爲に、日蓮主義といふものは非常に混亂に陥つて居るのである。今世間一般に唱へられて居る題目は殆んどお釋迦様を忘れて居る、堀の内のお祖師様ちやとか、柴又の帝釋様ちやとか、或は中山の鬼子母神様ちやとか、さういふものは、その拜むことの善し惡しよりも、さういふ事をやるが爲に一番大事な根本のお釋迦様の有り難いことを忘れて居る、さういふものを信する信じないの可否は後に廻しても、お釋迦様を忘れる所に罪があるのである、阿彌陀様を信することに何も罪があるのではない、阿彌陀といふ名に捉はれて本佛釋迦如來を忘れる所に罪があるのである。女房を可愛がることに罪があるのではない、女房を可愛がるが爲に親を忘れる所に不孝の科といふものを生ずるのである。それを知らないで「女房を可愛がるのが何が惡うございますか」といふやうなことは、頭腦が不透明だから起るのである。鬼子母神ちや、帝釋ちや、不動ちや、大師ちやといふことの如何は暫く措いて、何故に佛教徒が釋迦如來を忘れて居るかといふ問題に返答をしなければならぬ、その返答が出来ないで自暴自棄のことを言ふ「忘れたつて構ひませぬ」地獄に行つたつて構ひませぬ」

……それでは駄目である。佛教徒にして釋迦如來を忘れるといふことはどうしても出来ないことである、又將來法華經を中心にし、一切經に基いて佛教諸宗の統一を宣言するものは、たゞ釋迦如來の御名に於て行はれることである。たゞ日蓮門下が「南無妙法蓮華經」と唱へるのは、今申すやうな釋迦如來に就ての大事な事柄を忘れないやうに法華經を棄てないものである、法華經を棄てるとお釋迦様の位置がハッキリしないからして、法華經を奉じて釋尊の大切なことを維持するのである。丁度帝國憲法を擁護するのは、憲法の文字を擁護するのではない、その紙を擁護するのではない、たゞ理窟を擁護するのではない、我が皇室の尊嚴を擁護するが爲に憲法を擁護するといふが如きものである。法華經法華經といふのは、法華經に依つて釋尊の地位、釋尊の立場、釋尊の有り難さが完全に説明せられて居るからして、法華經が有り難いといふことになるのである。お釋迦様の有り難さから離れてしまつて風來のものになつて法華經が有り難いといふ理窟が何處にあるか。皇室から離れてしまつた日本の憲法の尊さが何處にあるか、親を棄て、しまつて孝經といふ書物に何の有り難さがあるか。「この書物は大事な書物です、親孝行の事が書いてあります」といふ、その孝經を以て親を打つが如しと日蓮聖人は言はれたが、釋尊を忘れる如きは、法華經を握ると雖も孝經を以て親を打つと同じことである、南無妙法蓮華經」と言ひながらお釋迦様の頭を叩きに行くのは、親孝行を教へた孝經を以て親の頭を叩くも同じで、日本の憲法を擁護すると言ひながら皇室の尊嚴を侵さんとするが如きものである。それは何としても許すべからざることである。

私のこの議論は決して間違ひはないと信じますから、法華經なり日蓮聖人の御書に依つてその事を詳しく立證しようと思つて居る。さうしてこの混沌たる數百年間紊れに亂れて、南無妙法蓮華經が何だか譯の

わからのぬやうになつて居るこの混亂葛藤を解決すべく十分にお話を致さうと思ふ。これが私の言ふやうに明瞭になれば法華宗はごんごん引まつて行くのである、今の弘まり方は嘘の弘まり方である。それは鬼子母神が有り難いとか、御祈禱が効くとかいふやうなことをやつて居るので、さういふことは法華經にもなく、日蓮聖人の御遺文にも根據が無いことであるから、説教も何も出来ない、たゞ無智なる者を對手に出鱈目にやつて行き居るのである。研究するほどそれは間違つた態度であることがわかる。然るに大勢の間違つた者が居るものであるから、やはりそれに引摺られて、南無妙法蓮華經といふことは何を言ふのだからか譯がわからぬ、婆羅門教の如く、眞言の混亂せる教の如きものになつて居るのである。このお祖師様といふことを無暗に言ひたがるのは、全く今日の眞言の弊風と同じことである、眞言では大日如來を本尊として居る譯だけれども、今日は大日如來は拜まない、六大即大日ちやといふやうなことを言つたものであるから、一切が大日ちやといふことになつて、弘法大師は遂に俺れがその儘大日ちや、生きて居る大日ちやと言ひ出した、そこで眞言は實に混亂して居る、眞言ぐらゐる雜僧のものは無い、雪隠には雪隠の神があり、臺所には臺所の神がある、何でも神ちやといふやうな宗教になつて、終ひには男女の愛法を講るといつて、男根のやうなものを祀ることまでやつて居る。實に婆羅門教その儘のものである、さうして一方は「御大師様」といつて、何も譯がわからずにお大師詣りをやつて居る、弘法大師はたゞ宗旨を開いたゞけの人である、それを「南無大師金剛蓮照」といつて、大師様をその儘鬼盧遮那如來に祀り上げてしまつた。法華宗がその通りで「南無妙法蓮華經」を擔いで歩いて、狐でも狸でも何でも構はぬといふことになつて居る、それから一方は「お祖師様お祖師様」といつて、日蓮本佛論まで擔ぎ上げて、厄除のお祖師様、日限のお

祖師様、何とかのお祖師様といつてやつて居る。そんなことは實に法華經を忘れ、釋迦如來を忘れ、ドク法華、雜欝法華となつて、眞言の弊風ツツクリその儘である。川崎の大師様に對抗するものが堀の内のお祖師様といふやうな譯である。向に斯ういふ低級な宗教は懺悔すべきことであるが、關東はさうもさういふ程度の者が多い、大體關東といふ所は昔は非常に文化の開けなかつた所である、關東から出て來た侍は後醍醐天皇の時分に、兒島高德が櫻の樹を削つて「天勾踐を空しする勿れ」といふ句を書いたけれども誰も讀むことが出来なかつた、何か書いてあるナといふだけで一人も讀めない、それを後醍醐天皇が御覽になつて非常に歎かれたといふことである。さういふ譯で關東の人間は低級な宗教に満足して「お大師様」お大師様」といつて川崎へ行く、さうしてお大師様へ詣りながら歸途には達摩を買つて來る、お大師様といふものは弘法大師を祀つて居るものである、それが達摩大師に化けてしまつた。さうしてその達摩をどうするかといふと、眼の無い達摩を買つて來て「その中に、めが吹くだらう、めが吹いて來たら眼を入れてやる」といふやうな譯で、さもなければ海豚の提灯を買つて歸るくらゐのことをやつて居る。日蓮聖人が命を懸けてお弘めになつた宗旨は、さういふ低級な暗愚な宗教と一緒に考へてはいかぬ、これは一切の道德、宗教、日本の文教の中堅として、神ながらの教も聖賢の教も、文化の總てを纏めて斯くあるべきものぢやといふ指導者の地位に立つて、本門戒壇建設の時分には皇室も參拜なされ、内閣諸公も參拜をした、この教の下に日本風教の統一を期せんとして起つた模範的の宗教である。であるからその點に於ては一概に數の多いといふやうなことを考へなくても宜い、時來れば一遍に花が咲くのである。將來の文化の上に立つべき宗教として、教義の上から眺めたら斯うなければならぬ、國民精神の上からは斯うで

ある、國家の前途を考へれば斯うである、佛教の本義は斯うである、人類文化の究極は斯うであるといふ大きな考察から調べる時に、一々台格する見本を備へて居りさへしたならば、この見本が宜からうといつてきまれば、今度は一遍に出来上つてしまふ。何も少々ぐらゐの人数が多い少ないといふことの爲に、ごま化しの宗教を宣傳する必要はない。今は日蓮聖人の教の御意は斯うだといふ模範的の見本を製造すれば宜いのである。左様な意味に於て尙ほ續いて釋迦如來の名號と法華經の題號との關係に就て詳細にお話をしようと思ふ。

大僧正 本多日生師著 本尊論

目次 一、緒言 二、宗教と本尊 三、諸種の本尊觀 四、本尊と真理 五、本尊と倫理 六、本尊と救濟 七、佛教の本尊觀 八、佛教の三寶觀 九、佛身の觀の要旨 一〇、滅後信仰の概観 一一、佛教本尊の三方面の考察 一二、佛身法華經に顯はれたる本尊 一三、遺文に顯はれたる本尊 一四、本尊の勸請文 一五、本尊勸請の實例 一六、遺文の會通 一七、異論の解決 一八、結論

定價 紙裝一部 金五十錢 送料金四錢 布裝一部 金七十錢

發行所 賣捌所

立正結社

名古屋市東區田代町常樂寺内

編輯局 統編輯局

振替名古屋一〇八一九番

信行の基調を説ける 觀普賢經 (第三回)

本經所説の大意 (續)

井村日威

實在の本佛を意識し、其色身を拜さんと熱烈なる信仰は發現して來るが、扱て吾人の凡眼は無始已來の重障の爲に盲られて、御佛の色身を拜することは出来な、善量品には令顛倒衆生雖近而不見と説いてある、顛倒の衆生なるが故に、直ぐ側にお在遊ばしても其色身は眼に映らない、拜みたいが拜めない、どうすると言ふことと爲つて、先づ我等の過去の罪障を取除かねば御佛の色身は拜することが出来ないと言ふことになつて其罪障を取除く方法を研究し實行せねばならぬ、其方法を説いたのが第二大段の行法と云ふのである、今經の始に「復當に煩惱を斷せず五欲を離れずして諸根を淨め諸罪を滅除する

ことを得べき」と云ひ「今此處に於て未來世の諸の衆生等の大乘無上の法を行せんと欲する者、普賢の行を學し普賢の行を行せん者の爲に我今當に所念の法を説くべし、若は普賢を見、及び見ざる者の罪數を降却せんこと今汝等が爲に當に廣く分別すべし」(論法四七六頁)と説かれてあるのは今申上げた意味で此經を説いたと傳せられたのである。

そこで其罪障を除却する時間は幾何を要するやと云ふことに就ては、最初の普賢菩薩を見るのに極短きは一日、これより三七日、七七日、或ものは一生、二生、三生までも掛かる、三度生れ替るまで掛らねば罪障の無くならないものもある、此は其人其人の過去世の業障の輕重に依り、信仰の厚薄に依りて異

なるので一定することは出来ないと言われている、先づ吾人の如き弱き信仰では三七日や七七日位で罪障は消滅し無いであろう、原木で一週間の御祈禱でお消滅した杯と考へて居つては飛んだ間違であらう、左程に手軽に消滅する様な罪の軽い御連中ではあるまいと思ふ、それが証據にはお消滅したと云ふても木で据へた佛様は見へるだらうが、生きた佛様は見へない、ほんとに罪障が消滅すれば佛様の立派な色身が見へる筈である、そうなるのを罪障が消滅したと云ふのである、お自我憫の一心欲見佛不自信身命時我及衆僧俱出巖窟山とある靈鷲山に説法教化して御座る生身の本尊にお出合するまで行かねばならぬのであります。

それから、其罪障を消滅せしむる實行方法は如何するかと言ふならば此經中に説かれてある處を纏めて申さうなら一、禮佛 二、誦經 三、發願 四、懺悔の四の方法である、經に

ふ様な事を言ひ出して、道徳に悖らうが世法に背かぬが一向構はぬと云ふ様な考を持つて居るが、一寸考へると簡單明瞭、横着ものには持つて來いだが、如何に大乘の教義でも善は善、惡は惡、止惡作善の行爲が無いならば宗教としての價値は存在しない、世を教ふの力は發現しないものと思ふ。

第一の禮佛は佛に對する渴仰の精神より發する恭敬尊重の形式で、此は今日本尊を安置して本尊の御前に信仰を捧ぐるの形となつて居るのである、本尊の實体は吾人の凡夫の眼には映らないから、止むなく、佛の御名を紙に書き御姿を木に刻みて、其寫象を通して吾等の信仰を捧ぐるのであるが、此場合に於て肉眼には其の實體を見ることは出来ないが、信仰即ち信仰の力にはおぼろげに其色身を見奉ることが出来る、今經に

大乘に因るが故に大士を見ることを得、大士の力に因るが故に諸佛を見奉ることを得たり、諸佛を

行者見已つて對喜敬禮し(禮佛) 復更に甚深の經典を讀誦し(誦經) 遍く十方無量の佛を禮し、多寶佛の塔を禮し及び釋迦牟尼佛を禮し奉り、並に普賢諸の大菩薩を禮して(再び禮佛) 此の誓願を發す、若我宿福あつて應に普賢を見奉るべくは願くは尊者遍普して我に色身を示し給ふべし(普願)と此の願を作し已つて晝夜六時に十方の佛を禮し、

(三び禮佛) 懺悔の法を行す(懺悔) (續法四八二)

と説いたのは已上の四種の行法を纏めて擧げられた御文であるが、他の場合には此中の一、二若くは二、三を交互して擧げられた事もあり、今經の後半には専ら六根懺悔の行法を説いて實行の方法と爲されてある、斯様に實際の行爲に其信仰を現して罪障を除却し得るものである、現今はあまりに佛敎を安賣し過ぎて居る、念佛門や法華宗の易修易行と云ふ様な事からお念佛さへ唱へれば、お題目さへ唱へれば一切其中に合んで居るから外の事は爲るに及ばぬと云

見奉ると雖も猶ほ未だ了了ならず、目を閉れば即ち見、目を開けば即ち見、目を閉れば即ち見、目を開けば即ち失ふと云ふ見方を信力に依つて見るので肉眼に見るのでは無い、信仰の目より更に肉眼にて見得る様諸佛を禮拜する、諸佛世尊は十力無畏十八不共法大悲大悲三念處まします、常に世間に在して色の上

色なり、我何等の罪あつて見奉ることを得ざる」と自分の罪の深さを慨いて五輪を地に投じて遍く十方の佛を禮するのである。

次に誦經で、此は佛の御敎を讀誦して其敎に導かれて、我等の行爲を改善して行くのである、現今の佛敎者の讀誦行とは意味が違ふて居る、現今の人の讀誦は讀誦其ものを功德として何十卷何百卷と多數に卷數を讀んで大功徳を積んだ様に思ふけれども佛敎に基いて見ると空讀で功德があると云ふことは何處にも見當らない、今經には

大乘經を讀み、大乘經を誦し、大乘の義を思ひ、大乘の事を念す。(經法四八二五〇八)

と説かれて讀誦の意味は、讀んだら其義を思ひ其事を念せねばならぬ、讀めば其義を思ひ其實行を念とせねば、讀誦した甲斐が無いと云ふことに爲るのである、善量品を讀んで本佛の慈悲を理解せず實在を意圖しないのは全く經典空讀の誤の結果である、若し讀誦しつゝ其義を思ひ其義を念じたならば當然慈悲も實在も頭の中に這入らねばならぬ、毎日何遍も繰返し讀誦しながら何の事が説いてあるか分らない様では何の爲に經文を讀むのか譯が分らん、善量品は一切經中の王、人の魂の如しと信じて讀んで居りながら、本佛の感應主たることが分らんで、今頃本尊が何んちやかちやと騒いで居る没分曉漢も居る様な有様だが、そんな事では佛敎も日蓮主義もあつたものぢやないと思ふ、もつと本氣に佛敎の研究を爲て、佛陀の御思召を領解せねばならぬと思ひます。

の濁てる器に清水を注入するも遂に清涼の水とはならない、一旦は濁水を打捨て、こそ清き水は充さるゝであらう、懺悔を説く所以は茲に在るのである、今は懺悔を忘れたる佛敎信者の多き事は慨嘆の至りであり、今經は行法として前の如き四種の方法を擧げてあるが、其中にも此懺悔の行法は最も重要なもので、前の三は六根懺悔の前提と爲るべきで、主要なる修行は懺悔の一行であらねばならぬ、今經の大部分が六根懺悔を説きし經文であることを見ても其義は明瞭であらう、我等衆生六道流轉の根本が、惡業の所作にあると云ふ以上、其根本の惡業を悔改めずして解脱の途を得ざるは當然の結論である、六根懺悔は我等が惡と業とを善化せしむる方法である、此行法ありて始めて我等の向上が期せらるゝのである、佛敎旺盛の我國が、道徳心に於て、公徳心に於て缺陷あることは、佛敎としては一考せねばならぬ重大要件と思ふのである、更に今經が其最後に王者

第三に發願は信仰の目的を定めたので、菩提を求むるのが、其終極の目的であるが、其終極の目的を達せんが爲に、先づ善賢菩薩の色身を見んと願ひ、次で十方の佛、次に本佛釋迦牟尼佛の色身を見奉らんと希望を起して、其目的を達せんと思つて居るが、現在の我等の信仰である、善量品に一心欲見佛不自惜 身命とは此に言ふ發願である。

第四に懺悔は信仰の効果を收むるには懺悔を修せねばならぬ、佛を見んと願ふも不幸我等が無始己來の貪瞋痴の所業は我等が身心を迷惑して此迷界に墮在して出ること能はず、佛身を見奉ることを得ざるに依つて、其過去世の黑惡の業を改悔懺悔して、其罪を拭取らねばならぬ、此は懺悔の行に依りて己を改めしめねばならぬのである。

凡そ宗教として改悔を誨へないものは無い、己が過を悔改めてこそ正道に歩入るものである、懺悔無くして正義に入り得ることは不可能である、濁水大臣利利(政治家) 婆羅門(學者) 居士(思想家) 長者(富豪) 宰官(官吏) 等の懺悔の法として五種の懺悔法を説いて居るが、此は殊に注意を要すべき經文であらうと思ふ、前段に一己人としての懺悔法を説き最後に公人としての懺悔法を説いたのは社會生活の上にも懺悔の必要あるを説いたので、一國風敎の上には國民全體を支配する敎があり其敎に導かれて健全なる國家が建設せらるべき大理想を實現すべき事で、日蓮聖人が本門戒壇道場建設の理想も此經文に基きしものと拜察するのである、以上今經所設の主要をお晰申上げて置いて詳細は本文に入つてお晰致す事と致しませう。



所謂方面委員制度問題に就て

醫學博士 石田 誠

筆記者 八 藤 綱 治

競近市町の大小如何を問はず其最も衆人の注目し易き場所に方面と云ふ揭示を毎日誰も彼も目撃致します。それには大概一様に一般通行人の一見して判り易く説明を加へてあります。之を一瞥した一般人は救済的社會事業のことであると云ふことだけは窺ひ知ることが出来ます。併し此の慈善的政策は一体いつの時代から出来たものであるか、又誰人が考案したものでありますか、或は又慈善事業には相違ありませぬが、其由来と之れが實行方法及其結果が如何なるものでありますかを解して居ませぬからして、市や町の之が方面委員と云ふ諸兄に種々質問する都度其の方法及實行に就きまして意見が相違して居る

ばかりでなく實際に其の局に當つて居る方面委員の方々も一般とは云ひませぬが多くの方は深く研究して居られない様に私は思はれるのであります。私は此の制度に就きまして久しい間之れが真相を知りたいと常に思つて居つたのであります。處が最近漸く此の救済方法に就きまして、真相を知りましたから、此處に皆様に御話するのであります。勿論私は當事者でありませぬから、萬一間違つたことがありませぬれば御遠慮なく御意見を承りたい。之等の事業を御互に研究しますれば共存生活の上にあつても非常な有利を齎すことと思ふのであります。

一 概 念

皆様も御承知の通り如何なる出来事でも之を深く追究しますれば、其出来事の依つて起る原因と其出来事の齎らせる結果が必ずあるのであります。而して此の原因と結果の二つの方面から考察することが必要であらうと思ひます。例へて見ますれば今茲に疾病と云ふ一つの現象がある場合に、其の疾病の現象は如何なる原因で起つたのであらうか、又其の疾病のために如何なる結果を來したかと云ふことを考究せねばならぬのであります。從つて其の疾病を治療する際に隨で、當然其の疾病の原因に就てなす場合と疾病の來す結果に就て處置する場合を二つに區別して考へなければならぬのであります。何故かと云ひますれば之が對症療法と云ふのは、其の疾病の惹起した種々の症候、例へば呼吸困難疼痛又は頭痛等を除去する爲の方法であります。又其の疾病の原

因的療法としては之が病根を除去する根本的療法があるのであります。恰度之が疾病の場合と同様に、此の世の中には貧困と云ふ社會の出来事がある場合に、貧困である爲めに之に依つて誘發する種々の貧困を救済する方法と、他面に於ては、其貧困の原因に就きまして、何故に貧乏になつたかと云ふ事に溯つて貧困を來した之が理由を研究して驅逐し得る救済方法があるのであります。だからして救済方法にも從て原因的救済方法と結果的救済方法に區別して社會政策の上臨まなければならぬのです。處で從來の救済方法に就て、よく私共が考へて見ますに、主として此の結果的救済方法であつたように思はれるのであります。換言すれば慈善事業は主として被救済的社會事業の結果的方面に就てのみでありまして、言はば救急療法の様なやり方ではあるまいかと思はれるのであります。如斯き方法では充分に救済事業の任務を果し得ると云ふことにはならぬからし

て、今後は如何しても歩を進めて其の被救済的社會事業を惹起せる原因に就きて追究し、而して其の原因となるべきものを除去する様な方法を講じなくてはならぬのであらうと私は斷言するのであります。

然らば何故に救済的方法を講ずるのに、原因に溯つて深く施行せなければならぬかと云ふ事は、假りに今茲に或る貧民部落があるとしまして其處に傳染病が発生したとすれば、忽ち之が他の人々に傳播せないと限らぬ、極言すれば共存生活の原則に基づいて直接に間接に社會全體が其の危険に冒さるべき關係があります。併し外觀上何等直接に悪影響を蒙らないように思はれても亦、見へましても、其危険を社會全體から除去する様に最善の努力を拂はなければ、何時迄も之が危険から免れることは出来得ないのであります。社會共同の福利増進を確保することが出来ないのであります。従つて吾々は此の前に述べました理由によりて、單に救済の方法を救急的

に處理せなくて、原因的救済方法を考究するのが今日吾々の責任であり且義務であらうと私は思ふのであります。

二 方面委員制度の意義

然らば如斯前に述べた意味の救済方法で、且自治的救済方法を兼備したものが所謂方面委員制度と云ふものであります。處で此の救済方法が、原因的であらねばならぬと同時に自治的であると云ふ様に處理して行くことが實際上當然の結果として發達して行かねばならぬ様に私は思はれるのであります。何故かと云へば、一つの被救済性、詳言すれば或る種類の救済を必要とする同様の事柄に就いても、其の土地の種々な關係に依りて其の起る状況や事象が各々多少異なつて居る、所謂部分的又は地方的色彩がありますから、之を救済する上に於て其方法に就きましても地方的に相違するものがなくてはならぬ

いのであります。だからして、救済を要する或る種の事項に就きても其原因をよく研究して之を救済せんとする方法を決定する場合に各地方的に相異なる遣り方を考へねばならぬのであります。斯る關係から見ましても、此の救済方法は、各地方の公共的團體の様相異なる様式を以て遂行しなければならぬのであります。之が眞に救済制度をして現今に至り、自治的形式を取る様に社會政策上自然がならしめたのではなからうと思はれます。然らば如斯方面制度を、先づ第一に誰れが發案したかと云ふことを歴史的に考察したならば、

三 方面制度の發案者及其歴史

今から約七十年前後の昔に、ダニエルフオンヘイドと云ふ銀行家が獨逸國の「エルベルフェルド」市に於きまして種々社會救済事業として苦心の結果考案したものが抑々今日の方面制度の發端であります。

其後獨逸國の各地に於て此の救済的方法を模倣して、種々之と殆ど同様のものが提案されて各地の情勢の相違及時代の變遷に依つて、種々修正され、其の各地方に適當した方面制度が施行される事になつて來たものであります。處で今茲に方面制度の根源たる所謂「エルベルフェルド」市で提案した方面制度と云ふものは、一体如何様なものであるかと云ふことを述べて見れば、次の様式のものであります。

(1) 「エルベルフェルド」形式

最初貧困者を救済する目的にて、「エルベルフェルド」市を、五百四十六方面に區劃して其の各方面の人口を三百人宛となし其の十四方面が相集りて、一區劃を形成し、各方面に一人宛の方面委員を撰び更に一區劃毎に一人の當番幹事或は常務委員の如き管理者を置きて其の全體を總括し之を監督指揮するに、尙九名の委員に依て成立して居る中央委員會を

組織し、其の九名の内の一名は其の會の職權を有する委員長となし、他の八名の内四名は市會議員であつて、残りの四名は一般市民から選出したるものであります。方面委員も亦當番幹事も勿論奉仕的の事業でありますから、無給で其の事業の施行發達上、其の會を統一する爲には常に市長の監督の下に奉仕的及慈善的に活動したものであります。而して其の方面制度組織の内容は、次の様なものであります。

(2) 方面委員制度の内容

上記の如き組織に基き執務活動して居るものにして、誰人でも救済を要求せんとする場合には、此の方面委員に要求の理由を精細に申出るのであります。すると方面委員が要求者の處に出張して、要求者の訴へる事情に就て精細に訊問調査をなし、其の結果救済すべき事情の必要ある者には、之に對する適當の救済をなすべく、一定の審査決定をして來るので

報酬で執務活動して居ると云ふ處にあるのであります。如斯無報酬で以て事情に慣れた人々を活動せしむると云ふことが特徴であります。然らば此の特徴と云ふのは人間が金銭で働くことにならば、勢ひ金を多く給せらるゝことに依つてよく働くと云ふ弊害を生ずることが免れぬものであります。何れにしても物質的報酬と云ふことを念頭に置いては救済事業と云ふ仕事はごうしても眞劍味がないのであります。だから斯様な奉仕的救済事業にはごうしても眞劍な考へで施行せなければ其の結果は効を奏し難いのであります。無給と云ふことが社會事業の特徴と云ふのは即ち此處であります。

(4) エルベルフェルド制度の行 政上に於ける特徴

此の制度に就きまして尙特徴と思はれることは、各地方によつて夫れ夫れ異なる事情がありますから

あります。其の審査決定した事項を、毎二週間に一度開催せられる一區内の委員會に之を報告し、十四名の方面委員が相集つて其の内の前に述べました當番幹事の下で精査決定書に基いて救済すべき方法を相談し、一区内に最も公平で不及のない救済方法を採るのであります。其の結果一定の報告書の様なものに記入して、之を更に中央委員會に提出すれば、中央委員會は其の區の委員會が開かれた翌日即ち二週間に一回の割合で開會されることになつて居りますから、其前日の區の方面委員會の報告に依つて中央委員會が其の報告書に基いて種々の救済方法を考究すると云ふ内容になつて居るのであります。

(3) エルベルフェルド制度の執 務上に於ける特徴

此の制度の執務上に於ける特徴は、各方面に夫れ夫れ最も種々の事情に精通して居る人が、しかも無

して、同じ種類の救済事業、例へば救貧とか、又は防貧とか云ふことに關しまして、其の實行方法に就きまして、自ら相異なるわけであります。そこで此の方面委員制度と云ふものは、其の相異つた意味で申しますと、甚だ適當な救済方法と云はなければならぬのであります。加之此の方法は各地方公共團體の下に其地方で起つた凡ゆる救済事項に就て其公共團體が自治的に救済を施行すると云ふのであります。だからして之が一層進んで行政上の組織を採る様な場合に發達しますれば、即ち社會政策が自治體化する理由になるのであります。否幸ろ斯様な自治的社會行政が時代の變遷と共に發達し初めて中央の監督的社會行政が漸次確立せらるる様になると云ふのが特徴であります。

(5) エルベルフェルド制度の救 済上に於ける特徴

尙此の救済制度の特徴の一として必要なることは、救済上にもあるであらうと思はれます。それは救済すべき或る一つの事項に就き、唯だ單に其の欠點を補助するばかりでなく、更に進んで其の救済を必要とする出来事が、如何なる原因に依つて起つて来たかと云ふ事柄にまで深く追究する制度でありまして、其の救済を要する出来事の原因を根本的に除くと云ひ得らるゝ積極的な救済方法が出来るわけで、これが其の制度の最も主眼とする使命でもあり且つ特徴ともなるのであります。

(6) エルベルフェルド制度の進歩

前に申述べました救済制度でありますからして、初め「エルベルフェルド」市では、主として細民救済の目的に其の制度を應用して居りましたが、爾來社會の状態が變遷して、其他に於ても救済せねばならぬやうな種々の救済事業が起つて来て、此の制度

は次第に單に細民救済のことにのみ止らず、其他種々の救済事項に對しても應用さるゝ様になつたのであります。従つて又各地でも此の制度を應用して、慈善事業又は救済事業の活用上に於て種々なる相違を來したのであります。

四 救済方面制度の施行至難

前に方面制度はどんなものであるかと云ふことをお話ししましたが、此救済事業を圓滑に施行せられると云ふことも至難な一つとなつて居ります。それは前にも申しました通り此の救済事業の制度は初めは、歴史的のものでありまして、救貧又は防貧のみにことに就て施行して居つたけれども現今では全くそうではない、今や廣く社會の救済と云ふ意味から云ひますと、勢ひどうしましても、種々な經驗と知識を必要とするやうになつたからであります。

例へば或る場合は法律のことに、經濟のことに

も亦衛生上のことにも多少關與せなければならぬ様なことが日常遭遇するからである。處が誰れしも人である限り多方面に就て知識經驗を持つことは到底不可能であらうと思ふ。然し此の方面委員制度の意義に就て考へて見ると、そう廣く總ての學識と經驗を各方面の委員が持つ必要も亦なからうと思はれる、寧ろ斯様に種々の學識經驗を持つ委員があつたとしても、それは獨りですると云ふことは一層至難のことであると思ふ、ですから實際の救済を施行する上に於て其の救済を徹底せしめるには、他に方法があらうと考へなければならぬ。それは實際の救済をどうゆう風に行ふかと云ふことは、若し被救済者側から救済すべき事項を申込んだ場合に、各方面委員の申告に基いて開かれた委員會で適當な具體化したる救済方法を立案するので、其の案を立てる場合には勿論相當學識經驗のある人に相圖つて實行方法を講ずるのでありますからして、方面委員は即ち業

務上の上では救済を調査して之を委員會に提出する委員であればよいのであります。現今我國各地方に社會事業の一として立案され又施行されて居る此種の委員制度の名稱は、種々異つて居るけれども、要は名稱の如何を問はず救済事業であると云ふことは明瞭であつて、之が救済事業の發展を社會一般のあらゆる救済事業に普及せしめんには、執務上に於ても奮闘努力を要することは論を俟たない。此の救済事業を發達せしめて防貧的又は原因的に救済せなければならぬことに就て、最も肝要な事項は各委員會から撰出せらるる委員は人格の如何に依つて興廢の岐れ目になるであらうと思ふ。處で一切の救済事業の發達は方面委員の學識經驗よりは寧ろ人格其物にあると云ふ事を結論として後に述べて見たいのです。

五 救済方面委員執務上の使命

斯様な意味からして、方面委員である以上は、委

員の使命として最も適確な各種の救済をせねばなら
ない極めて精密の調査をなし遂げた種々の材料を委
員會に提出すると云ふことが最も主要任務である。

之を更に詳しく云へば、精密な調査所謂社會的診斷
を下すことが任務上最大の使命である。處で此の社
會的診斷を下すには、委員會に大體の順序と様式を
立案して居らなければならぬ。それはどうゆうも
のであるかと云へば、次の様なことが必要であらう
と思ふ。先づ第一に(甲)被救済者から云へば、

- (イ) 申出た被救済者の原籍、住所、姓名、年齢、
職業、就中申出者は成るべく世帯主又は戸主た
ることを原則とせなければならぬこと。
- (ロ) 被救済申出の理由 (1) 生計及職業 (2) 健康及
疾病 (3) 就職及離職 (4) 其他風習法律に關する

一般人事的事項。

(ハ) 以上四項に關する被救済者側の希望條件。
上記の各事項に就て成る可く精密に被救済者側より

記載せしめて具申せしむることを原則とす。(乙) 方
面委員側に就て云へば、

- (イ) 被救済者の住居する周圍の關係に就て精細の
觀察。
これは其の土地の衛生、人情、風儀、如何なる
區域か又は其の區域は農村地帯、工場地帯又は
商業地帯か、特殊の災害、例へば地水火風の地
變及天變の有無、經濟上の打撃の有無又は特殊
部落なるか等の各精密なる觀察を要すること。
- (ロ) 家庭の訪問。
(1) 訪問者の態度、被救済者の家庭を訪問する
場合は殊に注意し、親切に申出人の意志を充
分聴取し、事情をよく觀察せねばならぬこと
とに就ては、
- (2) 方面委員は番間を發するに當りて成るべく
責任者即世帯主から(A) 先づ現場に就て調
査、就中家庭又は同居人の數、殊に現在養は

果して正當なるや否やを調査したる後、
(1) 記載、報告、及宣傳。
以上精細な事項を記載し之を委員會に報告し次に
之に對する適當なる救済的處置に關し、委員相互間
に意見を交換して、事宜に應じて適當で、しかも公
平なる處置を取らねばならぬ。尙此の施設に就て實
際上の好結果を充分に期する爲めには、一般に救済
者と云はず各方面の者に其の方面制度の眞髓を充分
に了解せしめることが最も必要である。之が爲には
宣傳も大に必要である。之を要するに社會の變遷に
伴つて、一切の救済事業を公平且つ無私に發達せし
むるには、方面委員其人の學識經驗よりは、寧ろ人
格其のものにあるのである。實際方面委員は人格者
の集合會であらねばならぬ。夫れは公平無私と云ふ
事は如何に學識經驗がありとするも、人格がなくて
は不可能であらう。方面委員と云ふ名譽職を賣名的
に誤解して居る者がある、従つて我田引水の如き偏

れつつある數△健康及び疾病の状態△素行氣
質△家庭生活の圓滿なるや否や△近隣との關
係△親戚知人との交際状態△酒を飲むや否や
△世帯主及家庭同居人の職業並に生活状態
以上に就て充分聴取り又は觀察して後精細に
報告書を作ること。

(A) 從來の生活状態に就て、就中幼年時
代の生立、健康状態及び教育の程度△結婚の
關係、其の當時に於ける生計及び資産状態△
職業及び住所の異動變遷並其理由△出生地、
兩親父兄其他扶養者との關係△其後に於ける
一身上の境遇等に就て聴取り調査すること。

(B) 以上の事項に就て調査し被救済者の要求
する各事項の審査に就て、先づ救済を申出た
る動機並理由、之に對する被救済者の希望の
正否。

(C) 充分精細に聴取りし上被救済者の希望は

重^{ちゆう}的^{てき}救^{きう}濟^じ方^{ほう}法^{ぽう}を講^{かう}ずるものがある。かように思^{おも}はるゝから勢^{せい}ひ人^{じん}格^{かく}者^者、殊^{こと}に各^{かく}地^ち方^{ほう}で譯^た譯^た人^{じん}か^からも尊^{そん}敬^{けい}せらるる人^{じん}を選^{せん}出^{しゅつ}せねばならぬのである。吾^{われ}々^々人^{じん}間^{かん}個人^{ごじん}として勝^{しょう}利^り者^者として世^よに立^たたねばならぬ、敗^{ばい}殘^{ざん}者^者として終^{しゆう}りを告^つぐる事^{こと}は最^もも耻^はづべきことである。又^{また}國^{くに}家^かとして國^{くに}が衰^{あつ}亡^{ぼう}に歸^きすると云^いふ事^{こと}理^りある。

淺^{あさ}間^{かん}しきものはありませぬ。國^{くに}家^か社^{しゃ}會^{かい}を思^{おも}ふ以上^{じゆう}は國^{くに}家^か本^{ほん}來^{らい}の目^め的^{てき}を達^{たつ}しなければならぬ、そして人^{じん}間^{かん}が勝^{しょう}利^り者^者たるには如何^{いか}なる職^{しやく}業^{ぎやう}、又^{また}は如何^{いか}なる方^{ほう}面^{めん}に立^たつても、必^{かなら}ず人^{じん}格^{かく}に基^きくのである。そうして之^{これ}等^らの救^{きう}濟^じ事^じ業^{ぎやう}の目^め的^{てき}が遂^{つい}行^{こう}せられることと私^{わたくし}は斷^た言^{げん}します。

記事

各地教報

京都袿書月布教 一日午後二時 於本山
國^{くに}禱^{たう}會^{かい}修^{しゆ}行^{こう}後^ご講^{かう}演^{えん}「國^{くに}恩^ん報^{ほう}答^た」原^{げん}田^{でん}本^{ほん}山^{さん}部^ぶ長^{ちやう}
△同日夜青年會宗教部研究會「經^{きやう}書^{しよ}研^{けん}究^{くわう}に就^{きつ}て」有^あ田^{でん}宏^{こう}道^{だう}師^し△二日夜曉正會例會於本山講
堂^{どう}「佛^{ぶつ}教^{きやう}大^{だい}綱^{かう}」原^{げん}田^{でん}日^{にち}男^{なん}師^し△八日於成就時曉
正^{せい}婦^ふ人^{にん}會^{かい}例^{れい}會^{かい}「道^{だう}義^ぎの根^{こん}本^{ほん}義^ぎ」原^{げん}田^{でん}日^{にち}男^{なん}師^し△
九日於正行院正行婦人會例會「我^{われ}が國^{くに}の美^み風^{ふう}」

原^{げん}田^{でん}日^{にち}男^{なん}師^し△十三日午後二時より於本山宗祖
會^{かい}殿^{でん}修^{しゆ}後^ご講^{かう}演^{えん}「思^し想^{きやう}調^{てう}整^{せい}の基^き準^{じゆん}」有^あ田^{でん}宏^{こう}道^{だう}師^し
△十四日夜於本山講堂青年會例會例會「共^き業^{ぎやう}
所^{しよ}感^{かん}」能^{のう}仁^{にん}孝^{きやう}教^{きやう}氏^し「時^{とき}事^じ問^{もん}題^{だい}に就^{きつ}て」會^{かい}長^{ちやう}細^こ
野^の長^{ちやう}雄^{ゆう}閣^{かく}下^か△十八日於本山講堂例月講演「我^{われ}
等^らの一念^{いっぴん}」金^{きん}光^{くわう}孝^{きやう}碩^{しゃく}師^し「本^{ほん}化^け別^{べつ}頭^{とう}の教^{きやう}觀^{くわん}」萩^{はぎ}
原^{げん}田^{でん}道^{だう}師^し△廿一日於本山大方丈青年會宗教部研

究^{きゆう}會^{かい}「經^{きやう}典^{てん}に翻^{ほん}れたる譬^{へい}喩^{ぎゆ}」中^{なかつ}村^{むら}英^{えい}俊^{しん}氏^し、「御^ご
遺^い文^{ぶん}講^{かう}義^ぎ」原^{げん}田^{でん}日^{にち}男^{なん}師^し
廿五日午後二時より本山に於て京
都^{きよ}統^{とう}一^{いつ}團^{だん}の總^{そう}會^{かい}を開^{ひら}き本^{ほん}多^た管^{くわん}長^{ちやう}親^{しん}下^か
の御^ご臨^{りん}席^{せき}を願^{ねが}ひ法^{ぽう}要^{ぎやう}嚴^{えん}修^{しゆ}後^ご一時
半^{はん}に渡^{わた}り頗^{おほ}く有^あ益^{えき}なる御^ご親^{しん}教^{きやう}があ
つた「朝^{あさ}鮮^{せん}行^{こう}所^{しよ}感^{かん}」本^{ほん}多^た日^{にち}生^{せい}貌^{ぼう}下^か
今日夜六時半より京都立正會主^{しゆ}催^{さい}にて烏^{くわ}丸^{わん}商
業^{ぎやう}會^{かい}議^ぎ所^{しよ}に於て大^{だい}會^{かい}を開^{ひら}く、會^{かい}場^{じやう}立^{りつ}録^{ろく}の餘^{あま}地^ち
なく二時間に渡る観^{くわん}下^かの御^ご講^{かう}演^{えん}には來^き會^{かい}者^{しや}何^{なん}
れも醉^{すい}へるが如^{ごと}く、法^{ぽう}華^か經^{きやう}と日^{にち}蓮^{れん}上^{じやう}人^{にん}、法^{ぽう}
華^か經^{きやう}と我^{われ}國^{くに}との關係^{けんがひ}を詳^{しょう}説^{せつ}せられ法^{ぽう}味^みを講^{かう}せざ
るものなかりき「社^{しゃ}會^{かい}教^{きやう}育^{いく}と日^{にち}蓮^{れん}主^{しゆ}義^ぎ」細^こ野^の

民^{たみ}雄^{ゆう}閣^{かく}下^か、「法^{ぽう}華^か經^{きやう}と日^{にち}蓮^{れん}上^{じやう}人^{にん}」本^{ほん}多^た日^{にち}生^{せい}貌^{ぼう}下^か
△廿八日午後二時より本山に於て開^{ひら}祖^そ會^{かい}修^{しゆ}行^{こう}
後^ご講^{かう}演^{えん}「宗^{しゆ}教^{きやう}生^{せい}活^{かつ}と道^{だう}徳^{とく}感^{かん}念^{ねん}」土^{つち}持^ぢ良^{りやう}道^{だう}師^し
關本健兒會拾遺月報告 一日午前九時
より於本山講堂高等部「日^{にち}蓮^{れん}上^{じやう}人^{にん}傳^{でん}」有^あ田^{でん}宏^{こう}
道^{だう}師^し△八日午前九時より於本山講堂「教^{きやう}訓^{くん}」
豊^{とよ}田^{でん}通^{つう}泰^{たい}氏^し△十五日午前九時より本山講堂教
に於て「孝^{きやう}の本^{ほん}義^ぎ」土^{つち}持^ぢ良^{りやう}道^{だう}師^し△廿二日午前
九時より本山大方丈に於て「眞^{まこと}の學^{がく}問^{もん}」土^{つち}持^ぢ良^{りやう}
道^{だう}師^し△廿九日午前九時より於本山新座敷「成
功^{せいこう}美^み談^{だん}」高^{たか}村^{むら}光^{くわう}雲^{うん}氏^し、土^{つち}持^ぢ良^{りやう}道^{だう}師^し、會^{かい}普^ふ通^{つう}部^ぶ
に於ては毎^{まい}回^{かい}前^{ぜん}諸^{しよ}氏^しの外^が山^{さん}田^{でん}、龜^{かめ}井^い、新^{しん}業^{ぎやう}の
各^{かく}氏^し及^{及び}本^{ほん}會^{かい}卒^{そつ}業^{ぎやう}生^{せい}會^{かい}友^{ゆう}諸^{しよ}氏^しの應^{おう}接^{けつ}に依^より好
成績^{せいせき}に進^{しん}みつゝある事^{こと}は統^とに喜^{よろこ}ばしき次第^{しだい}に
して第二國民教養^{だいにんきやうぎやう}の爲^{ため}益^{えき}々^々奮^{ふん}闘^{とう}を祈^{いの}る。

和^わ弄^{りやう}田^{でん}氏^し「所^{しよ}感^{かん}」大^{だい}庭^{てい}中^{ちゆう}佐^さ「三^{さん}大^{だい}秘^ひ法^{ぽう}」京^{きやう}藤^{とう}
師^し△八日平山宅にて受^う持^ぢ文^{ぶん}に就^{きつ}て、京^{きやう}藤^{とう}師^し△
十二日堂園寺にて御^ご會^{かい}式^{しき}法^{ぽう}要^{ぎやう}を講^{かう}演^{えん}して「日
蓮^{にちれん}聖^{せい}人^{にん}の高^{たか}恩^ん」金^{きん}光^{くわう}孝^{きやう}碩^{しゃく}師^し「實^{じつ}生^{せい}活^{かつ}と信^{しん}仰^{やう}」
熊^{くま}井^い布^ふ教^{きやう}師^し△十三日蓮成寺にて「正^{せい}しき信^{しん}」三
好^{こう}師^し「日^{にち}蓮^{れん}聖^{せい}人^{にん}の大^{だい}恩^ん」金^{きん}光^{くわう}孝^{きやう}碩^{しゃく}師^し、知^ち恩^ん報^{ほう}恩^ん熊^{くま}
井^い師^し△十四日堂園寺にて學生日蓮講會「四
諦^しと十二因^{いん}縁^{えん}」中^{なかつ}川^{かわ}文^{ぶん}學^{がく}士^し。

千葉縣湊津本齋寺落成式 上^{じやう}總^{そう}の巨
會^{かい}する會^{かい}員^{いん}多^た數^{すう}の申^ま出^{しゅつ}でにより近日相^{あひ}談^{だん}會^{かい}を
開^{ひら}き更^{さら}に同^{どう}會^{かい}の發^{はつ}展^{てん}策^{さく}を講^{かう}演^{えん}することを申^ま合^あせ
た。

京都立正統一會例會 十一月三日夜講
演^{えん}會^{かい}「日^{にち}蓮^{れん}は第三^{だいさん}の法^{ぽう}門^{もん}なり」萩^{はぎ}原^{げん}日^{にち}道^{だう}師^し△
十日夜研究會「妙^{めう}法^{ぽう}蓮^{れん}華^か經^{きやう}勸^{くわん}持^ぢ持^ぢ品^{しん}第十三^{だいさん}」萩^{はぎ}
原^{げん}日^{にち}道^{だう}師^し△十六日夜講演會「宗^{しゆ}教^{きやう}生^{せい}活^{かつ}に入^いら
ずんば眞^{まこと}の樂^{がく}なし」萩^{はぎ}原^{げん}日^{にち}道^{だう}師^し△廿三日夜研
究^{きゆう}會^{かい}「妙^{めう}法^{ぽう}蓮^{れん}華^か經^{きやう}安^{あん}樂^{らく}行^{こう}品^{しん}第十四^{だいしち}」萩^{はぎ}原^{げん}日^{にち}道^{だう}
師^し。

同日堂園寺にて談^{だん}話^わ會^{かい}「實^{じつ}在^{ざい}意^い識^{しき}の信^{しん}念^{ねん}」京^{きやう}
藤^{とう}師^し「佛^{ぶつ}陀^だの大^{だい}慈^じ悲^ひ」上^{じやう}田^{でん}師^し△二十五日講^{かう}演^{えん}
會^{かい}「日^{にち}蓮^{れん}聖^{せい}人^{にん}の宗^{しゆ}旨^ぎ」和^わ弄^{りやう}田^{でん}氏^し、「報^{ほう}恩^ん抄^{しやう}大^{だい}要^{ぎやう}」
上^{じやう}田^{でん}師^し。何^{なん}れも盛^{せい}會^{かい}多^た大^{だい}の効^{きう}果^{くわ}を奏^{そう}せり。
金澤教報 能^{のう}仁^{にん}一^{いつ}十^{じゆ}師^し入^い山^{さん}式^{しき} 宗^{しゆ}命^{めい}に
依^より金^{きん}澤^{さく}本^{ほん}長^{ちやう}寺^じに赴^{しゆ}任^{にん}されたる能^{のう}仁^{にん}一^{いつ}十^{じゆ}師^しの
入^い山^{さん}式^{しき}を十一月廿二日午前十時より執行、式
後^ご同^{どう}師^しの入^い山^{さん}の挨拶^{あいさつ}ありて後^ご見^{けん}玉^{ぎよく}宣^{せん}師^しの一^{いつ}
場^{じやう}の法^{ぽう}話^わありたり、會^{かい}する者^{しや}多^た數^{すう}盛^{せい}會^{かい}なり、
◎天^{てん}晴^{せい}會^{かい}講^{かう}演^{えん}會^{かい} 本^{ほん}長^{ちやう}寺^じに於て廿六日午後六
時より例^{れい}會^{かい}を開^{ひら}く、杉^{すぎ}田^{でん}常^{じやう}政^{せい}師^し開^{ひら}會^{かい}を宣^{せん}し能^{のう}
仁^{にん}一^{いつ}十^{じゆ}師^し見^{けん}玉^{ぎよく}宣^{せん}師^しの熱^{ねつ}心^{しん}なる講^{かう}話^わがあつた

し八月中に工^{こう}事^じを竣^{じゆん}成^{せい}し其^{その}の莊^{じやう}嚴^{えん}を完^{かん}美^みし全
く面目^{めいもく}を一新^{いしん}せり、依^よて十一月十二日御^ご會^{かい}式^{しき}
を兼^{かね}て善^{ぜん}講^{かう}澤^{さく}成^{せい}音^{いん}樂^{らく}大法^{だいぽう}要^{ぎやう}を修^{しゆ}す、會^{かい}する
檀^{だん}信^{しん}徒^だ六^{ろく}百^{ひやく}名^{めい}を越^こへ、定^{じやう}刻^{こく}に到^{いた}るや吉^{きち}田^{でん}老
僧^{そう}正^{せい}尊^{そん}師^しのもとに檀^{だん}信^{しん}十^{じゆ}數^{すう}名^{めい}は樂^{らく}僧^{そう}の奏^{そう}樂^{らく}禮
に莊^{じやう}嚴^{えん}なる法^{ぽう}要^{ぎやう}行^{こう}せられ、星^{せい}野^の住^{ぢゆう}職^{しやく}の慶^{けい}讃^{さん}
文^{ぶん}に次^{つぎ}小^{せう}竹^{ちやく}管^{くわん}等^らの祝^{しゆ}詞^じ、檀^{だん}家^か總^{そう}代^{だい}評^{へい}議^ぎ員^{いん}の
祝^{しゆ}詞^じ、各^{かく}地^ちよりの祝^{しゆ}電^{でん}等^らあり、次^{つぎ}で管^{くわん}等^らより
檀^{だん}家^か功^{こう}勞^{らう}者^{しや}に對^{たい}する賞^{しょう}狀^{じやう}の傳^{でん}達^{たつ}式^{しき}ありて午後

大阪教報 十一月三日川口宅「斷^{だん}當^{たう}の
迷^{まよ}見^{けん}」京^{きやう}藤^{とう}師^し△五日蓮成寺にて「臨^{りん}終^{しゆう}正^{せい}念^{ねん}」

和^わ弄^{りやう}田^{でん}氏^し「所^{しよ}感^{かん}」大^{だい}庭^{てい}中^{ちゆう}佐^さ「三^{さん}大^{だい}秘^ひ法^{ぽう}」京^{きやう}藤^{とう}
師^し△八日平山宅にて受^う持^ぢ文^{ぶん}に就^{きつ}て、京^{きやう}藤^{とう}師^し△
十二日堂園寺にて御^ご會^{かい}式^{しき}法^{ぽう}要^{ぎやう}を講^{かう}演^{えん}して「日
蓮^{にちれん}聖^{せい}人^{にん}の高^{たか}恩^ん」金^{きん}光^{くわう}孝^{きやう}碩^{しゃく}師^し「實^{じつ}生^{せい}活^{かつ}と信^{しん}仰^{やう}」
熊^{くま}井^い布^ふ教^{きやう}師^し△十三日蓮成寺にて「正^{せい}しき信^{しん}」三
好^{こう}師^し「日^{にち}蓮^{れん}聖^{せい}人^{にん}の大^{だい}恩^ん」金^{きん}光^{くわう}孝^{きやう}碩^{しゃく}師^し、知^ち恩^ん報^{ほう}恩^ん熊^{くま}
井^い師^し△十四日堂園寺にて學生日蓮講會「四
諦^しと十二因^{いん}縁^{えん}」中^{なかつ}川^{かわ}文^{ぶん}學^{がく}士^し。

和^わ弄^{りやう}田^{でん}氏^し「所^{しよ}感^{かん}」大^{だい}庭^{てい}中^{ちゆう}佐^さ「三^{さん}大^{だい}秘^ひ法^{ぽう}」京^{きやう}藤^{とう}
師^し△八日平山宅にて受^う持^ぢ文^{ぶん}に就^{きつ}て、京^{きやう}藤^{とう}師^し△
十二日堂園寺にて御^ご會^{かい}式^{しき}法^{ぽう}要^{ぎやう}を講^{かう}演^{えん}して「日
蓮^{にちれん}聖^{せい}人^{にん}の高^{たか}恩^ん」金^{きん}光^{くわう}孝^{きやう}碩^{しゃく}師^し「實^{じつ}生^{せい}活^{かつ}と信^{しん}仰^{やう}」
熊^{くま}井^い布^ふ教^{きやう}師^し△十三日蓮成寺にて「正^{せい}しき信^{しん}」三
好^{こう}師^し「日^{にち}蓮^{れん}聖^{せい}人^{にん}の大^{だい}恩^ん」金^{きん}光^{くわう}孝^{きやう}碩^{しゃく}師^し、知^ち恩^ん報^{ほう}恩^ん熊^{くま}
井^い師^し△十四日堂園寺にて學生日蓮講會「四
諦^しと十二因^{いん}縁^{えん}」中^{なかつ}川^{かわ}文^{ぶん}學^{がく}士^し。

よりは原宿教師木村義明師暨原宿其師等の講演と神樂芝居手踊等の餘興あり、夜間に至る迄も参詣者黒山をなし近來稀れの盛況にして餅村の一角に廣宣流布の血潮漲れるは七星法華改造の先鋒として喜ぶべし、因に當日星野、鶴澤、山下、小池等の法弟諸師發金となり吉田老師の建齋除幕式を執行せり、紀念碑の全文は野口鏡下の揮毫によると。

東京統一團教報

△十一月一日「本尊意識に就て」土屋信玄、本果本因本國土三妙合論の實行、野口日主△八日「批判と啓蒙」怪川日堂、佛教徒と釋尊に歸れ、本多日生鏡下△同十五日「統一團教會式法要並講演、一日蓮主義」本多日生鏡下△同廿二日「平和招來の鏡」梶木顯正、眞に求むる者の相、小西日喜△同廿九日「時代推移と佛教」高木日晴、渡鮮所感、井村日成、「法華經と日蓮聖人」本多日生鏡下△十二月六日「法華經は佛教の歸結なり」梶木顯正、一日蓮主義、臘月八日觀「野口日主、法華經と日蓮聖人」本多日生鏡下△同十三日「時代の推移と佛教」秋山乾英、「法華經と日蓮聖人」本多日生鏡下△同廿日「時代の推移と佛教」長谷川義一、佛

北陸通信

の道一森川可修。
北陸三縣は人も知る如く兩本願寺の産所であり來歴である、自他共に許せる念佛門徒の根據地であることは多言を要しない、しかも其の中の一つである福井縣、殊に坂井郡は彼の蓮如が永住地として、又縁をどし、肉付の面と云ふ、私共から見れば三文の價値もない、鬼形面を存するので、所謂信男女と稱せらるゝ、風天恩慈を、彌が上にも集はしめ、有難や勿体なやと涙を絞らしめつゝある吉時を附近に控へ、念佛門徒の金城鎮望と豪語しつゝある處であるが、その春江村江留上の地には、本化門下としても今の世に稀に見る信行者であり、女丈夫である西島久雄女史は、自ら好んで居を構へ、一意専心宗風宣揚を企圖しつゝ、五風霜を過されたが、其の間常に本多大師正觀下闍友信正等宗門高德の方々が福井市來錫の折は、萬事を抛つて、開法に給仕に意を注ぎ、道念益々濃に、笑ゆる思ひをひそめつゝ、只管「時を待つべきのみ」の聖語を誦し時機の到來を待つて居た。過る九月の頃に闍友信正紀野俊禪師の本尊に關し又信行生活の常相に關する御高教を受けて、彌が上にも幾

謹で新年を慶賀仕候

謹賀新年

顯本法華宗宗務廳

井村田 武崎 川崎 大森 中島
日顯 英龍 日英 元道

謹賀新年

統一編輯局

國友 古田 富田 常英
日斌 日昂 常英

本多日生

正賀

總本山妙滿寺

本山部長 原田日勇
社會部主任 有田宏道
布教部主任 土持良達
法要部主任 豊田通泰
事務所詰 三好信道
全松井會雄

山根 井村 中川 笹川 武田 松尾
日東 日威 日錦 日堂 龍明



恭祝新年 正法興立
皇道隆昌 萬民安堵

我等同人は茲に大正十五年の元旦を迎へ立正の光明に沿し立正の希望に充ち向上の一路を辿りて皆歸妙法の志願を達成せんとす
此の意味に於て互に新年の慶賀を交換し其の前途を祝福す。

(次第不同)

東京市赤坂一ツ木町

常玄寺 森川 日修
四谷南寺町 法恩寺 秋山 乾英
牛込原町(常樂寺) 青村 山根 日東
早稻田南町 正法寺 木村 日保

小石川原町

本念寺 大須賀 玄遊
千葉縣君津郡佐貫町 妙勝寺 小竹 圓妙
本郷蓬萊町 顯本寺 池澤 日辰
蓬萊町六番地 涌井 常顯

下谷初音町

本授寺 笠原 琢瑞
七軒町 妙顯寺 長谷川 義一
京橋月島西仲通リ三ノ二 月島立正會主任 吉井 乾淨
府下池袋字蟹ヶ窪 盛泰寺副住 安田 台城
東京市淺草永住町 妙經寺 野口 日主
南松山町 法成寺 關田 日城
新谷町 壽仙院 森川 泰修
吉野町 常福寺 金阪 義昌
府下品川町商品川 本榮寺 高木 日靖
同 妙蓮寺 笹川 日堂
同 本光寺 今成 日誓

同

清光院 伊保内 教精

同

眞了院 大森 日榮

大井町五、一、三、三

井上 清純

大森町東山谷

立正教舎 大原 亮

入新井町新井宿

善慶寺 石渡 英哉

雜司ヶ谷水久保

本教寺 井村 日咸

(常樂寺出張所) 元寬受院 田島 義潤

同 龜原

圓常寺 鈴木 日雄

巢鴨町染井

蓮華寺 土屋 信玄

小笠原父島大村

法蓮寺 木谷 常榮

神奈川縣戸塚在飯田

本興寺 三上 義徹

橋樹郡大綱村大豆戸

本乘寺 前田 圓整

中原村字神地

統一團員 西山 喜太郎

小田原幸町

妙經寺 三橋 會要

栃木縣鹽谷郡北高根澤村字上柏崎

妙顯寺 芝沼 瑞良

茨城縣鹿島郡若松村太田新田

長照寺 田久保 日城

東京市牛込區辨天町二六立正結社

妙道會 會員 一同

臺灣臺中新富町

顯本教會 松鶴 妙明

朝鮮釜山西町一丁目

顯本教會 橫山 惠正

支那營口

妙光寺 岡松 乾丈

千葉縣千葉郡森張町長胤寺

胡蝶園莊夢 梅澤 天純

皇の御代豊かなり玉の春(莊夢)

千葉市本町一丁目

本圓寺 草切 信榮

千葉縣千葉郡生實濱野村濱野

本行寺 橫山 會章

北生實

本滿寺 黒須 無外

市原郡濕津村下野

本泰寺 星野 純義

喜多

壽福寺 今井 俊貞

潤井戸

泰行寺 鶴澤 純貞

古都邊

行福寺 小池 辨碩

市西村海土

泰安寺 秋葉 日虔

姉ヶ崎町

妙經寺 松井 道安

同(牛込原町常樂寺滯留) 寶藏寺 野口 會英

同

長遠寺 高岡 文憲

同

常教坊 山下純秀

君津郡佐貫町

安樂寺 齊藤見玉

馬來田村真里谷

本立寺 德會 嘆

安房郡館山町 本蓮寺住職

千葉毎日新聞主筆
雜誌人澤生幹

小林日種

市原郡内田村原田

本傳寺 栗原顯有

長生郡長柄村山根

飯尾寺 飛山日甫

同

滿藏寺 長岡育應

船木

安樂寺 山本賢乘

味庄

常光坊 岡元教一

二宮本郷村國府園

如意輪寺 成嶋日衛

庄吉

福庄寺 竹内顯領

真名

本源寺 秋葉日敬

山崎

妙行寺 野老乾一

同

豐田村小本 宮川日佑

同

澤井通穩

同

長尾 山田誠心

同

寶泉寺 成島隆康

慶當

光福寺 牧野恂義

本納町

蓮福寺 川崎英照

同

龍教寺 富田貞叔

法日

法福寺 山形眞瑞

東郷村本小善

蓮成寺 高貫賢龍

豐岡村查場

本大寺 北田知一

粟生野

圓立寺 吉見俊教

關村園

本法寺 小島洗明

白瀉村古所

安住寺 酒井眞隆

豐田村大登

萬福寺 矢部事正

白瀉村古所

東昌寺 水谷大雲

新治村下太田

萬光寺 渡邊日命

柱

安立寺 小宮智應

吉井

光明寺 木村弘英

山武郡土氣本郷町大和田

寶藏寺 内田專學

大権

長興寺 米倉義明

山邊村金谷

法光寺 渡邊善儀

餅ノ木(藝術布教園)

法輪寺 手代木常整

大網町宮谷

本國寺 土屋賢生

同

蓮照寺 木村義明

同

長福寺 北田信昌

増穂村上貝塚

蓮成寺 森田會正

大和村福俵

本福寺 堂亮雄

田中

法光寺 高田日暢

丘山村丹尾

東成寺 宮代向政

同 油井

興善寺 都築信寛

福岡村上谷(東金西福寺)

常福寺 鷺澤泰温

豊成村前内(東京小石川白山
四常寺遺留)

常覺寺 中島元道

宮

蓮成寺 鷓澤暉温

御門

妙善寺 海老澤乾樹

白里村北今泉

等覺寺 松永會淳

豊海村眞龜

淨泰寺 廣部乾山

同 西野

善立寺 鈴木正二

片貝村片貝

本隆寺 土屋眞容

同

教行寺 矢田智光

小關

妙覺寺 河野見中

東中

法道寺 小高顯章

東金町

本漸寺 中村日錦

同

立藏坊 石井信顯

臺方

妙福寺 金坂乾受

川場

東福寺 天崎會温

北之幸谷

妙德寺 武田顯龍

公平村松之郷

本松寺 夏目智誓

東金町(品川妙福寺)

嶺根寺 齊藤昭行

印旛郡川上村東吉田

最成寺 塚越通曉

佐倉町酒々井

經胤寺 前田日應

彌勒

妙經寺 田邊慎一

千葉郡白井村多都田

最福寺 渡邊義準

福島縣若松市甲賀町

妙法寺 竹内無着

福島縣郡山町

郡山顯本團

山形縣東置賜郡梨郷

本覺寺 日暮玄靜

梨郷村砂塚

蓮藏寺 鈴木乾徹

盛岡市外北山

法華寺 木下圓通

青森縣八戸町

本壽寺 中田量叔

北海道札幌市白石町

顯本寺 本澤隆正

同

顯本寺 總代人一同

札幌郡江別町

法華寺 木原文靜

靜岡縣三島町

本妙寺 森川秀光

田方郡國南村大土記

妙高寺 吉塚通榮

伊東町玖須美

妙隆寺 壘 勳光

庵原郡松野村北松野

妙松寺 大津日文

磐田郡見付町

玄妙寺 山本通辨

濱名郡吉津村吉美

妙立寺 岡本圓正

同

正學坊 藤本智宏

白須賀町

妙泰寺 高橋遵碩

愛知縣豊橋市清水町

妙圓寺 松本堅晴

渥美郡田原町

當行寺 野中通玄

二川町二川

妙泉寺 加藤圓順

碧海郡刈谷町

長遠寺 武藤照惠

知多郡東浦村緒川

越境寺 二 會善

名古屋市古渡町

靈山町 清水一乘

三重縣四日市市沖嶋

安樂寺 熊井乾堂

京都市寺町二條

妙滿寺中 原田日勇

有田宏道

土持良達

豐田通泰

上京區鴨川東西寺町二條下ル

本正寺 金光孝碩

下京區高辻東洞院

妙祐久遠寺 坪永日監

京都市府新舞鶴町九條

信行寺 桑村常信

圓部町木崎

大乘寺 木村日順

綾部町

了圓寺 武聖 麟

北桑田郡知井村

本妙寺 大塚會叔

大阪市天王寺區生玉前町

堂閣寺 京藤日樊

東區西高津中寺町

蓮成寺 上田智量

立正結社大阪支部員一統

同 婦人會員一統

明石市大藏谷

圓乘寺 川崎本照

姫路市五軒邸

妙立寺 中川日史

同

妙善寺 橋本常昭

岡山縣赤磐郡周匝村草生

久成寺 田中通正

岡山縣津山町

本蓮寺 大川孝準

勝田郡飯岡村吉ヶ原

本經寺 吉塚通暎

英田郡土居村土居

本典寺 牧田英長

鳥取縣鳥取市立川町

法泉寺 桔梗開章

廣嶋市東伯那松崎

本立寺 富田日進

松川町

妙詠寺 島田憲一

廣嶋縣吉田町

蓮華寺 富元會榮

廣島縣高田郡丹治比村

大德寺 河村孝岳

大津郡三隅村

了性院 町田事光

福岡縣久留米市寺町

本泰寺 中原通應

同

立正結社九州支部

福井縣足羽郡社村南居

妙正寺 兒玉日見

丹生郡志津村山内

本行寺 墨 照玄

石川縣金澤市始坂

本長寺 能仁一十

中本多町 本行寺 石橋會章

岡山市山崎町

本行寺 能仁事一

朽木縣宇都宮市寺町

法華寺 大川圓精

同 立正結社宇都宮信仰懇話會員

福田安吉

同

海野六合

同

中里雲泉

同

黑崎文男

大阪市西區市岡町七〇五ノ參

愛下章一

高岡市源平町

島山友次郎

統一團名古屋支部

久米良昭

船橋寬治

船橋金藏

謹賀新年

廣嶋市新川場町本照寺
紀野俊耀

謹賀新年

岡山縣和氣町本成寺
嶋田日闡

謹賀新年

山口縣萩町妙蓮寺
吉永日洋

謹賀新年

統一團神戸支部顯本布教所
熊井本光

謹賀新年

千葉縣君津郡木更津町成就寺
第三布教區
小竹俊雄

謹賀新年

千葉縣山武郡土氣本郷町本壽寺住職
東京市淺草區北清嶋町統一團
梶本顯正

謹賀新年

東京市淺草區新福井町
小西日喜

賀正

第三布教區 本宮寺 (在住)
第五布教區 善勝寺
溝口會旭

謹賀新年

京都市寺町二條妙滿寺
中水寮 中島孝治

謹賀新年

東京府南葛飾郡本多村立石六〇一
水野三太

社寺建築及臺灣檜材の安價提供

設計監督 (二三年以上水蓄乾燥材)
當所は社寺建築改善の目的を以て臺灣總督府及内務、
文部兩省の了解の下に臺灣檜材の安價提供及工事の
計設又は監督の御依頼に應じ可申候間工事の大小に
拘らず左記御便宜の個所へ御相談被下度候
追て設計規程並に目安表又は臺灣檜木質見本等御
入用の向は御申越次第呈上仕候
(充分なる水蓄乾燥材を以てする檜材最も優良なるも水蓄不
充分なる檜材は于刻狂ひ等の缺陷多きものであります)

社寺工務所

- 神奈川縣 鶴見町 (電話青山六〇二八番)
- 社寺工務所鶴見支所
- 福岡市外堅箱町馬出松原
- 社寺工務所福岡支所 (電話二二三〇番)
- 大阪市西區市岡町七十九番地
- 社寺工務所大阪支所 (電話西三二二四番)

臺灣檜材の特大六
一、耐久防腐
二、蟻害絶無
三、香氣清楚
四、木質堅緻
五、木理整然
六、木色高雅

| 統一價定 | |
|------|--------|
| 一冊 | 金貳拾錢 |
| 半冊 | 金壹圓貳拾錢 |
| 一ヶ月 | 金貳圓貳拾錢 |
| 送料共 | 送料共 |
| 金前 | 金前 |

| 統一廣告料 | |
|-------|------|
| 表紙一頁 | 金貳拾圓 |
| 一頁 | 金拾圓 |
| 半頁 | 金五圓 |
| 四分一頁 | 金九圓 |
| 送料共 | 送料共 |
| 金前 | 金前 |

大正十四年十二月十七日印刷納本(第三百七十號)
大正十五年一月一日發行

不許複製

編輯所 東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
編輯人 國友日斌
印刷所 鈴木日雄
東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地

發行所

統一發行所 總發東京五一〇七一番

編輯所

統一編輯局 名古屋市東區代田町字城山七七番地
電話長東五四八七番
電話名古屋一〇八一九番



目 次

| | |
|--------------------|-----------|
| 釋迦如來の名號…………… | 本 多 日 生 |
| 信行の基調を説ける觀音賢經…………… | 井 村 日 成 |
| すゝみゆくみち…………… | 原 口 晃 |
| 七つの變…………… | 長 谷 川 義 一 |
| 聖訓を拜讀して…………… | 藤 原 幸 八 |
| 記事報導…………… | |

